

# 漂雲



そらかた号

立命館大学ワンダーフォーゲル会



写真説明

夏期△口宿アルバム

「右上」高谷の池より火打山

「右下」池ヶ峰牧場

「左上」高谷の小屋より火打山

高谷の池のミズバシヨウ

「左下」火打山奇姿の下にて



## 発行を祝して

顧問 山岡 新一

最近我が国に於いても、ユースホステル運動、ワンダーフォーゲル運動の価値が認められ、本学に於いても両面の大事に先んじてワンダーフォーゲルの念が誕生し、目を遠くして盛大になりつゝあることは嬉しいことである。元来、我が国の学生運動、青少年運動は精神主義中心で政治とか、修養とかに重点をおき、レクリエーションという事に無関心であった。ワンダーフォーゲル運動は、国内や国外を遊歴することによつて、郷土愛や愛国心が涵養され、之が平和運動にもつながつてゐるものである。而しその本質は青少年の自然の欲求や本能から出発して青少年の心身を鍛えてゆくことが主眼でなければならぬと思ふ。ワンダーフォーゲル運動の起源を訪ねると、遠く人類発生の時代にさかのぼらねばならないが、直接的には十九世紀終り頃から提唱された、都市生活の不自然に対する反動として大自然への旅行の奨励と云ふことである。所が中世初期から布教のための伝道の旅、行商人の旅が行われ、文芸復興の時代に入り学術研究のためにラテン語を頼りに大学から大学へと移り歩いた放浪学生の旅、等々が行われ、十九世紀に入って広い意味のレクリエーションとしての旅行への動きが芽生えて来たものである。これらの背景のもとに新しく教育的意図の下に提唱されたのが大自然への旅行運動であり、ワンダーフォーゲル運動である。野外旅行のグループを作つて長期休暇、祝祭日を利用

して、或いは読者で、或いは自転車登山の大自然を遊べ、或いは各地の青少年と交親し、光  
進地を観察、見学を行って、指定の宿泊所又はキャンパス等で宿泊し乍ら自然の探求、郷土史の  
研究、スポーツ交親、音楽活動等を樂むことこそワンダーフォーゲル運動の花であらう、我々  
人河が新しい経験や、未知の世界に入りこむことは冒險であり、旅はこのスリルを多分にもち  
てゐる、之は我々に新鮮な夢を与えて、それが現実化することによって更に深い歡喜を与える  
であらう、ニューヨークタイムズ紙はこの運動を「偉大な平和への力」と呼び、又「戦乱の中  
にも物らず困難を越えて平和と友情の歌をうたおうよ、金力も力も何かせん、求むるは善意  
にみちた兄弟、姉妹」と叫んでゐる、リユックザックを背に、顔に汗して、我々は雲の行方  
に迷ひ、その想いにしたばう、ワンダーフォーゲル運動のある所、平和と愛への憧れの声を  
聞く、一戦争はもういやだ、これは我々の叫びであり、眞実の声だ、皮膚の色、信條の別を問  
わず、全人類の平和が我々の目的であり、願ひであれば自由な平和へのかけ橋として、すべて  
の世界が手をつむぐ爲にワンダーフォーゲル運動が益々盛んになり発展することを願つてやま  
ない、こゝにワンダーフォーゲルの機関誌発刊にあたりその前途を祝福すると共に、一人でも  
多くの学生の協賛を願つてやまない。

## 創刊にあたって

ライター 永 辻 啓 介

久しく待望の会誌第一号がようやく出来上つた、内容はともかく一誌 格構が附いたという

事は誠に喜ばしい、これで又一つワンゲルの楽しみが殖えた事になる。

僕は元来、楽しみは多い程良いと考へてゐる、尤も純粹な楽しみというものが全く無いと云  
う事は、倫理學の初歩でも習つたし、日常の出来事でも身にツマされてはゐるが…… 現にこ  
の会誌を上梓する迄にも、多大の労苦を重ねられてゐるだろう事は、察するに余りある、だが  
楽しみに附随する楽しみは甘受出来るものだ、發行の苦しさなどもそうだ、まあ、これに耐え  
られない人は、楽しみを得ようなどとは考へずに何もしなさい事だ、只、僕にとつて最も理解し  
難き人間は、並に苦しむ爲に苦しんでゐる手合だ、それが口を棘する爲の手段に於いてある  
のならば否も亦もないが、趣味の世界に這それを待たせぬのはどうかと感ず、最もその場合でも  
楽しむが無いとは云えない一つの場合がある、マゾヒストの場合だ、だが、吾々のワンゲル会  
の中には、その様な病人は居ないと思ふのだが、

それから会誌の名「源雲」 旨画自讃だが如何にもワンゲル風で、実に素晴らしいと思ふ、  
会の方針はどうあれ、会員各自は永久にこの精神を忘れてはならない、これを忘れる時はワン  
ダーフォーゲルなる一語を頭上に頂く事を恥ぢねばならぬ時だ、

最後にニーチエの感言 【寢巻をながめて】

かつてドイツ人は着物はだらしなかつたが、それでも余別を持つていた、かなしいかな事は変  
つた、いかめしい衣装に身を固める様になつてから、ドイツ人はその仕立屋のビスマルクに  
せつがくの分別を呉れてしまつた、願わくば僕に分別を下さいませんかように



# 石の上にも三年

リーダー 永 辻 啓 介

吾々のワングルも創立以来早三年目を迎えた。創会者初スック戦に首振りザックでボクホフ歩いて来た。吾々も昨今ではバリッヒレたオーダーメイドの一流メーカーによる山靴ならびにキスリングである。

余の組織活動に於いてもニ流WVなみに、幸多かりしがなニ流の人。河濱に行われる様になった。これも場に合資相互の金と力を出し惜しみしない会きワングルへの熱情が然らしめたものである。だが手放しで賞めちぎってはかりは居られない。所謂三年目の危機と云う物騒な怪物が吾々の両面を徘徊しているからだ。

では吾々に於ける三年目の危機とはそも何

か一つづつ考えてみよう。  
一 自信喪失

技術上に於けるものならば比較的早く片が附く。つまり遭難するが、早晚裏手が折れるのは必定であるから、

癒り難いのは形而上のヤツ。このデキモノは恐るべき悪魔を放つ両者とも会にひとつも個人にとつても甚大なる悪害を及ぼす小児病。但し前者はワングルの回数を増やす事によって後者は知的水準を引き上げる事(悪者の側から見れば切下げる)により癒る見込はある。

## 二 対抗意識

古しその畏者は云った「腹にしまえば美德

となり 外に出せば悪徳となる」

## 三 ワンダラーにとつて好ましからざる歌河

へ 吾よ岩よ…… 俺達は街には住めないから

に、  
眞実、自然を愛する者はもつと謙虚な筈だがね。

## 四 ワンダラーのスタイル

誰か鳥の何だ鳥のワングル活動か。その意味もロクに考えない連中は大抵意の先には下下している。ニラ云う手合を称してアポンドラーと云う。

まあ、並等の人間は一箇の人間としてのホコリだけで満足して置きましようや。

## 五 チームワーク

これは無理に造らうとしても出来るものではない。肝要な事は常に全員が腹を割って置く事(ケンカにならうがなるまいが)さすればイザ鎌倉という時、力を発揮出来る。

## 六 上級生と下級生の関係

正に「ニツマミ」の年輩いどろしてそんなに偉いのか。只、マージマン、パチンゴですら教えてもらふ時は腰を低くせねばならぬのは昔り前。

## 七 本末顛倒

恒し「だから俺は偉いんだぞ」と云う上級生が居たら自分よりバカだと考えて宣しい。最近、ワングル運動に対して世上一般の両心が高まって来るにつれ、ジャーナリズムがひんげんに係り上げる様になつた。給

筋な事である。  
だがそれと共にジャーナリズムに売り込まんが為に殊更に奇を衒つたワングルもひんげんと出渡す様になつた。

これを「阿呆と煙りは何人ヒヤラシ」の心腹でやっているのなら罪が軽いが、そらでない場合は胸糞が悪い。  
學生は純粋さが身上である事を肝に銘ずる

事。

### 大義名分

これが癖で附くからと云つてナメているとトンデモない旨に幾多事を世間の尸史が証明して呉れる。

### 凡ソ何事によらず一つの運動を普及せしめるには実に他道な努力が要る。

鳴り物入りのデモンストレーションだけでアツピールすると思つたら大間違いだ。新語の宣伝でもそう簡単には行かない。差し當つて吾々が為すべき事は一人でも多く会員を得る事。

## 昨年度の反省から

最近、会員相互間に於いて、昨年度の会の

十本横論を口にする態度

ニイチエは云つた。歩いて得た思想だけ販賣の代りだ。

土、ついでに本年の活動方針

「半年は、会の為」後の半年は「各人の好み」の活動、会活動の目的は一人前のワングラマーを養成する為(チームワーク)その他は附随的に造られる。従つてパーワン、フライワンに於いては諸兄が何を期待されよう。個人の良識とワングルの範疇に於いて完全なる自由である。

参照、活動計画表、規約。

(3)

### 前リーダー 本所 明夫

運営に就いて成功したとか、失敗であったと

かたびく論じられて来た。又責任者であつた私も例外なく例会や総会等機会ある毎に会員達と共に自己反省して来た。そして話す毎に昨年度の運営は失敗であつたと云う意見が会員向で溢く。私も同じ考えであり、責任を感じている。そして私は会員達が自己反省する様に、昨年度の運営の失敗の原因追究に努めて来た。特に新年度の役員達とは失敗の原因を詳細にわたつて追究し、新年度からは昨年度の失敗を繰り返さない様に運営方針を立てられていた。だから、私がここを昨年度の自己反省、特に失敗の原因をのべるより新運営方針を種解すれば、自ずから失敗の原因を知ることが出来ると思ふ。会員が各自、自己反省をしたり、あらゆる運営に關する批判、反省、又運営方針を立案する時、常に発願を目標にしていると思ふ。その我々の望む発展と云う有に就いて会員達各々正しい認識をし

ているだろうか、我々が発展と口にするのは

ワングル運動と部の発展だが、特に私は部の発展について、会員向で重要視してはいないのではないかと云う。若し部の発展をおろそかにするならば、我々の運動の発展も望めないと思ふ。如何なる運動にしても自然発生的に社会から未組織の個人がその活動をして大きな国民運動化することは無いと思ふ。

私は活動者が組織され、そして組織活動することによつてその運動が社会に認められて運動が発展していくものと思ふ。だから私達が組織している立命ワングルという部の発展が運動の発展にもなると思ふ。それで私は昨年度の継続的な反省をうながして部の発展について皆とあらためて考察したい。尚反省に關して諸君に話したこと、重複する点があるが悉しからずお許し下さい。

昨年度の運営の失敗の原因として、私の統率力の不足、新入部員の不足、方針の不備等挙げられる。その内でも方針の不備が最も大

(4)

きは失敗の原因であつたと思ふ、この方針の不備についてであるが、私は私なりの信念の基にスタートしたのである、僅し、現在は誤つていたことに對して責任を感じている、即ち私は皆も知つてゐる新米ワシントン運動を信じていた、そしてそれを我々の組織内で活発にするべきことを願つていた、又それを組織内で活発にすることに自体が組織の発展であり運動の発展であると信じていた、だから活動に關しては会員自由にして何ら部の規制を設けぬ事にしたのである、又会員もそれを望んでいただけと思ふ、この方針の基に夏期合宿前迄活動して来たが、單に登山を抜擢してゐるだけでその内に活動のマンネリや組織に対する意識が、ありこれ迄の自由な活動に關して何の聲に突き當つた感なしで来た、單に現在の自己満足のために我々が組織してゐるのだからか、若しそうでないなら我々の組織の発展とはどんなものだろうかと言ふ疑問に思ふ、これ

迄組織に對する認識不足から單に社交場として組織を利用し、我々ワシントン運動の爲に組織してゐると云ふ認識がなかつた弊である、そこで私は夏期合宿を前後としてこれ迄の活動の自由放任制からある程度の活動に對する規制をする様に改めたのである、然し私は規制の爲に規制をしようとしたのでない、我々が運動の爲に組織してゐるのならば、その発展は会員がその組織の責任ある企画に参加し、活動することにあると思ふ、そして我々の部は他の如何なる活動をすべき部と変らず、會員の相互扶助によつてその組織、即ちチームの発展があるのである、單に組織を社交場や器具、貸与機関に止まつてはならない、だから私は組織の発展は組織活動にあると思ふ、その発展の爲の組織活動をするには必ず規制が必要になる、

運約な運営をする役員に就いてであるが、昨年度は全く一人又は二人で何から何までやつて来た状態であつた、特に昨年度の運営の失敗の原因がここに内在してゐたと思ふ、即ち 雑用の多すぎた事、そして運営に關してリーダー一任と云う形であつて、非常にやりにくかつた、運営に關して一任されると全責任が一人にあり、又その方針について客観的に指適する者がなく責任者の思い通り行なう様になり、これらの形態をせよと云ふにして独裁的になるか、幸ひかれ主義に安易に任事を終えろと云う、悪い結果となり非常に危険な事構成である、特に后者の場合は何ら新面目が出る事がなく、先も述べた様に事なかれ主義に陥入るからと強かな運営に關する組織を作り、運営の責任はその構成員の共同責任にすれば昨年度のよきな運営の失敗はないと思ふ、私も后期にリーダー会を組織したのが名無實に終つたが、今年度は初めか

ら運営責任を有するリーダー会を組織してゐるから思い切つた方針や、企画が出されるものと思ふ、又私もそのメンバーに入つてゐるのでその様に努める、然し如何なる強かな役員構成が作られても我々が美風とする役員と、會員、上級生と下級生の間に通れる思いやりの精神だけは持ち続けねばならない、これらの組織に對する意識や強かな役員構成で組織運営に當るのであるが常に我々の発展は活動する事によつて発展があるので、いくら正しい組織に對する認識をもつて、しつかりした運営担当者がいなくても實際組織の発展の爲の活動を活発にせねばならぬ、私が先述したその組織活動に就いて如何に規制するかと云ふと、その責任者である運営担当者が如何なる場を提供しても會員が有意義に活動を遂行す様に努めねばならぬ、即ち先述した、但し組織活動するにしても、その場のマンネリ化と云ふことが亦々にしてあるが、私は他の機会



に述べたことがあるがその場の長板に當つて我々が活動する場を國民化する必要はないが必ず変えねばならぬことはない、最近よく探検に就いてジャーナリズムが騒いでいるがそれらの当事者はほとんどが、よき山岳家連である、我々も良きワンダラー、よき山岳家になつても良き探検家になつても、よき旅行家になつてもよいと思ふ、だから私は我々の活動の場も如何なる場をいつてもよいと思ふ、然し、その場も特色なる場を選びたいと思ふ、又活動について組織活動と並んでただ合宿だけに限らず常のワンダリングにしてもその場で活動するだけでなく、その計画に於いても組織的な担当扶助が我々の組織活動たる事は必定である、だから我々は如何なる活動でも組織活動する事によつて組織活動がスムーズに行くものと思ふ、この活動の場に向しては何も問題はないと思ふ、そしてこの活動に就いて組織の発展のために会員全体が正しい

組織と正しい行動をせねばならない、つきにこれら活動を通して運動の社会啓蒙に就いてだが、運動に於いても昨年度は部の充実と社会啓蒙と云ふ事をモットーに組織して行つては、特に社会啓蒙であるが我々も校内で活動に行つては、これも常に会員が正しい認識をせねばならない、即ち、単に社会啓蒙と云つても、それはその団体の名声をあげたり、個人の名声を挙げるのが社会啓蒙ではない、特に個人の名声即ちその活動をジャーナリズムが騒いだからと言つてそれが啓蒙ではない、そうゆうマスコミの波にのるのも我々には好都合であるが、忘々にしてこれらマスコミはまがった報道をしがちであり、正しい報道をしても、その熱心なことをされたからと云つて我々の運動の啓蒙になると思ふことのない様に努めねばならない、我々は素直に地道な活動をすることによつて社会人に理解してもらわねばならない、然し單に活動していても被

社会人に理解さすには我々の活動の有意義性を説かねばならない、だから今后この運動を社会運動にするにはワンゲル運動をするに當つて信念をもつて運動をせねばならない、特に、私は、我々の人生観をこの運動を通して把握する様に正しい行動をとりたく思ふ、そして長い年月を経ることによつて、この運動する人々が社会に出て良き社会人として成長すれば我々の運動の有意義性が理解され、又我々とは常日頃の社会人としての行動に就いて、ワンゲル運動をしていさるものヒレで靴しなくない行動をすることによつて、目的が達成出来るのである、

以上、色々と羅列したが会員もよく理解して今後の組織運営をスムーズに運び、組織発展の爲努力するにヒレが人肉完成に近づくと共に、組織発展や、運動発展が見られるのである、そして又、運営担当者も、昨年の運営失敗をよき材料に正しい運営をしてくれれば、

私も昨年度の責任の幾らかでもつゞまはれるその様に運営する所希望する、



## ワンゲルと私の考へ

柴原 裕

今は山中、今は浜、今は鉄橋渡るをと思ふ、向もなくトンネルの闇を透つて志野原と、歌の文句通り、汽車に乗って目的地へと旅行を続ける、汽車だけが目的地への到達手段ではない、汽車の旅行もワンゲル活動の一つとみる、自転車旅行もあれば、徒歩旅行もある、要するに、汽車にしろ、徒歩にしろ、サイクリングにしろ、空間的距離の克服それ自体にワンダーフォーゲルの活動の要素が入つていふと思ふ、大名旅行が好きなので汽車のことはかりになるかもしれぬが、汽車からの窓

からの眺めが変れば珍らしくもめり、先づしにもなる。そして見聞を広め、事にもなる。所変れば呂変るである。本で見たこと、人から聞いたことを実際にみて再確認し認識を新たにすることは必要であると思う。これこそワングルの精神であり、又本領でもあると思う。実際に経験をすることにより多くのより正しい知識を増進しそして認識を新たにすることであると思う。

学生時代のワングル活動に於いての体力の向上。チームワークの発達は実社会に於けるワングルの活動の基礎を造るものであると思う。ワングルの活動、すなわち具体的に遠征旅行、サイクリング、ワンデリング、登山らをする事により、より頑強な身体に練達し心を豊にし余裕をも持たせるであろう。そして、人をしてロマンチストにするであろう。又、普段、気の小さい者でも気が大きくなるのも事実であろうと思う。ワングルの活動は個

作ることであると思う。苦しむばかりが能ではない。その後に楽しみがなくてはかまへしである。苦あってこそ樂あり、樂を味うのは苦を過なければ本當に樂を味うことは出来ぬ。泰山など典型的な例であると思う。苦守して山に登り、今にもぶっ倒れそうになりながら頂上に着く。目的地に着く。その時の感情はいいあらわせない。それ程喜びを深く強く感じる。このことは成しとげた人でなく、人は味えないと思う。

旅行すること自体がワンデリングの一つの側面であると思う。旅行は旅先で樂しみがあふ、その一つはその土地の珍しい特産物である郷土料理を味うことである。地方独特の趣味をこらしたみやげものももらい食ったときの味と実際にその土地で買って食ったときとの味の差は同じ巨物であっても違ふ様な気がする。もちろん現地食うときの方が面白い。その土地へ来ていない者への優越感が

人活動もあるが団体活動の方がより意義が大きいであると思う。交友を広め、友と共に心おきなく話す、論じる。そして互に批判し合う。友をやる。己自身の欲を知り、友の長所をみる。そして自他共に己について長所、短所を発見し、長所は伸ばすことにより己自身より改善し、正しきものを身につける。又短所はこれを自己反省し矯正する。これこそは実社会に必要な基礎を築き、条件をそろえる。そして前記のことが現実社会に即し、生存競争のはげしいこの世の中を乗りきる何か必要な一部分を身に自然とつけるのであると思う。しかしワングルは話し合ふと云うことはあつても討論会の場ではない。それ故堅いことばかり云うのではない。大いにくだけて軟派論になるもいたしかなない。又それでいい、のではないかと思う。先ずは、ワングルは運送より実行である。そしてチームワーク、各人相互の運送を論議しそして和を

勝る所であろうと思う。私は大々旅行という程大げさな旅行をしなことはないが、しかし旅行の際は行き先で必ずその土地の名物、特産物らの何かを食うことにしている。そういふことはその土地を一層遠くへ進む。そしてその土地を知ることになると思っているからでもある。もちろん念のあるときだけで、金の持合せのないときはけしかなない。金をかりてまで飲み食いする必要はないと思う。しかし必要のあるときもあることがある。要するに特産物をその土地で食うところに値うちがあるのだと思う。又旅行をして先のつくこととはその地方独特の言葉、すなわち方言である。何かわからぬ言葉を聞く。とそれの意味を知りてくくなる。その意味を知つたならばその方言を話してみたくなる。これ人情である。方言を研究することにより、人々の言葉尻やアクセントから出身地を云いあてる。又方言はその地方の風俗、習慣を念むこともあり、

故に方言の由来やア史を考察することも出来る。これも余しみの一つである。井の中の蛙になつてはこまる。見聞を広める爲には旅行すること。目で見たことは忘れ難いものである。

旅行は社会見学の一つである。旅行は学生時代にしておくべきである。例え経済的に不自由であつても、学夜を出ると社会的に、家庭的に、経済的に束縛される。先輩達は学生時代に旅行をすべきであると言ふ。又学生時代に旅行はすべきであると思ふ。学生に限られた特権が存在する。国鉄からの交通機関の割引。一般社会人から学生に対してみる目には確かに学生へのある特権が認められる。だからこそ我々学生はこれらの特権を大いに活用すべきである。学割らの恩恵はもつての外である。又社会に於ける学生の特権は少くはかりの常識はすれのことをして、学生だもので済むことが多い。だから行動もしやす

いのである。実社会の世界では学生以外の者の行動については学生のもそれよりも、もっと批判されるであらう。又実社会人であつたならある程度体裁をかまひ行動に自から慎重にやるであらうと思ふ。と云つて学生は常識はすれのことをする親進めたのではない。悪いことは正しくに改めなければならぬと思ふ。この改善こそワングレル部員が率先して行う使命であると思ふ。

## ワングレルに 入会して

長谷川 勇

このような文章を書くには、かつて体育クラスあるいは体育クラスの組織に所属していた人が書けば奇型児的存在たるワングレルの特徴や長所短所がよりはつきりと正しく書ける

のではないかと思ふ。レガレ残念ながら僕自身としては過去に於てこのような立場になつた。中学時代テニスを一季半位したが、後の関係は非常に不愉快な経験のみを同窓会的存在であり命令系統は全然なかつた。高校時代は文化系のクラスに一年籍をおいたがほとんど活動しなかつた。僕の主人は関東平野と山岳地帯の境にあるので秋には一月中あるいは三、四時位一人あるいは三、四人の友達と子を取りに山を歩き廻つた経験もある。以上でもわかるように過去に於て団体活動に経験がない。書いて述べれば青山年赤十字の活動くらいである。このように過去の経験を細ることによつて僕の感想文が客観的に見て正しいか否か判断してほしい。オーに感じたことはワングレルの奇型児的存在ということである。はたしてスポーツなのか娯楽なのか、もちろん自分自身でバックをかつぎ自分自身

の足で山野を歩き、健康を獲得し喜びあるのは羨しみを感出すことを目的とせばならぬ。レガレ阿じ楽しみにしても娯楽的な楽しみとスポーツの楽しみとは自然からその見出し方が異なるはずである。このことは今問題になつていける体育会入会問題にも関係してくると思ふ。体育会に入会するにはワングレルはスポーツ団体であるというところが前提でなければならぬ。このことは文化的活動の除外という結果をまわくのではないだろうか。実際の文化的活動はなかつたようである。ワングレルの発源地ドイツでは娯楽型態は非常に排斥されているようである。自転車旅行が非常にさかんであるがワングレルの施設にオートバイで来るは全然相手にされないとのことである。レガレスポーツの目的である時阿、娯楽、高き、遠度への挑戦が欠けていると思われる。日本の場合、大体の傾何山に向けられており、しかも山岳部ともハイキングとも



似つかず性格が不安定でいまだに「ワングル」とは何者かとの問題に悩んでいるような気がする。これは外面からの輸入品であることに最大の原因があるのだから、だが山岳部とは場所の遷定においてハイキングとはスポーツ的性格において相異が見出されると思う。オニに我々のクラブに於ては強力な組織よりよりは、すつきりした組織が欠けていた。これは過去一年の経験しかなくったことに最大の原因があった。レタレワングルの性格、特にパートワングルが中心であったことが一層この点を助長したのではないかと思う。パーワンにおいては、上下の關係は、ほとんど必要なくつたし、また格差したから余りいものにならないからである。レタレならばこのような弱点は夏山合宿に判然と表われた。山岳部の友達にワングルでは新人は肉体的労働においてしほられるのかと問われたことがあったが、これには答えようがなかった。パー

来たわけである。先輩は二回生も三回生も四回生も区別がほとんどなかった。だから一回生だけが上級生に対して尊敬をつけるのはある程度の抵抗があったのは事実である。また一年あるいは二年浪入した人の場合は別な意味で抵抗を感じたのではないだろうか。レタレのような不敬問題？、その問題となること自体不自然である。なぜならワングル一回生とワングル二回生とは自然から異った立場にあるはずである。なぜなら経験が一年多いからである。今後吾々は先輩にふさわしい知識と経験と技術を取得して仕事も命令するよりは自分から率先して行ひ、後輩が手を出さざるを得ないような環境にしたいと思う。これは非常に難しいし、自分としても行い得る自信はないが、このような方向に努力する自信はある。このようにして少しでもワングルらしい特色を作つてゆきたい。

オニに強制的に参加させられぬことである

ワンの時は誰も同じようであったが夏山合宿の時はリーダー格が全部重い荷を持っていった。リーダー格の者はこの上に精神的努力も課せられるのであるから、本木頼樹と云わねばならない。部員の体力を担い得なかつたことによる大きな原因があつたから、山岳部に於ては強力な命令系統は自分自身の生命の安全のために必要であるからワングルにおいては、絶対的必要性はないと思う。

ワングルとして必要な統一性は参加し活動し互に理解することによって得られると思ふ。強制的という形態をとる必要性は少ない。レタレに批判と反省が伴わねばならないが、僕自身としても過去の行動を反省している点が多いし、気付かない点は他人に指摘されねばならないからである。オニに上下の区別が非常に薄いことである。入会した当時は過去一年の歴史しかなかった。故に先輩は誰もが平等な立場にあつた。そこに我々は飛び込んで

る。僕自身もこの條件を知つて入会したのであり、経済問題もからまるから強制的は好ましくないけれども活動する程度はあるはずだ。僕自身活動は五回二十七日にすぎなかつたが、経済的に批判されたとは云へ、最低かも知れない。年に一回が二回位しか参加しない、名前だけの人も居るようであるが、過去のクラブの都合就取運前の変形？くらいにしか考えないで活動しない人を知っているから不快を感じてレタレがない。レタレレタレは規約ができるのでこの問題はなくなる。オニにボックスでの時間の費やれ方にも問題があると思う。僕自身ボックスであまり時間を費やさなかつた。レタレに強制的にされることでもないから他人のことに言及すべきではないかとも思う。レタレ我々のボックスであることには決りない。問題は時間の浪費である。へまだそれを見れば、部員間の親密さを増していることも見のびせないが、特にスキーバスの時は僕にとつて



時可を測くことはほとんど不可能に近かつた。またスラン登教の阿題についてであるが、一回主の発表がないのには、いくらか理由があると思う、僕自身行きたい所があつたが、その機会がなかつた。僕自身のことではあるが発表する自信がなかつた。技術経験についておとつていゝことは自明であるから、ワンゲルに入会したのは二つの大きな目標があつた。それは健康を維持すること、肉体生活の経験を博することだつた。特に後者に就いては他の余頁に比して欠点を多く持つてゐるにもかかわらず、面体生活に経験の少ない僕にとつて得るところが大きい。この文章は批判であると同時に僕自身の反省でもある。書き切れないうちもあつたが重要な点は書いたつもりである。批判すべき点があつたら注意してほしい。



又ワンゲルの連中は皆な面白い奴等ばかりで一人一人が個性をもつていて、その中でも山にでも入れれば一層個々の人間性が赤裸々に現れてくる。

此のような連中と山に行ける私は大変幸せな男だといつづく感がある。又時なも一度や二度は経験のあることだろうと思ふのだが、以前は何の爲にしんどいのか山等に登るのかとよく聞く人々から云われる。この様に云われるともう辨解する気にもならない。なる程我々は苦しい急坂を一步／＼登つて行く。そしてピークを目ざして、しかし人々が云う様にピークには何も無い、その何も無いピークを目ざして我々は登る。一步一歩登る。苦しい時を我慢して、これは入主の體面的に我々は山登りを通して肉体的に精神的に我々は練磨されるのは勿論。お互の友情をも養い青春をエンジョイしてゐるのだが、私は此處に於て一つ疑問をもつてゐる。

## 雑

## 感

寺沢武雄



私はワンダーフォーゲルに入部以来今年で三年目になる。又ワンダーフォーゲルが出来て今年で三度目の春を迎えたわけになる。本学に入部以来ワンダーフォーゲルと共に歩んで来た。私自身常にスライドを持ってゐる。思ひかえせば部が出来た頃は部室もなく毎日研心館横のベンチへ理社は無いに集まり何とか部の団結を全員のフェイスを燃していたものだ。未だ入部して一ヶ月たらずの新入生ばかりの部で学校中でも珍らしい存在であつた。それでも比叡山のハイキングを始め数々の行幸をやつてのけ、夏休みには妙高高原に於て一級海主と共に楽しいキャンピングを行い大成功をおさめ誠に良く出来たものだ。現在思い出しでも感心するくらいだ。

それは我々大学生が登山するのには確かに苦しい坂道を登り肉体的に精神的に練磨されお互の友情を養う。これは確かに立派な事だ。しかしこれだけなら大学生でなくても高校生でも出来ることだ。

それなら大学生の登山とはどの様な登山を指して云うのか。それは私にも理解出来ない。この様に云うとある者は「俺達は山岳部員でなく、ワンダーフォーゲルの部員だ。故に登山の方法等阿題ではない」と。又ある者は「多雲だろう。一ではお前は初登攀が大学生の登山と云うのか。なる程これ等は誠に苦を得た所だが、私としてはもっと我々でも出来る所に立ちもつと手取にその方法がある様に思われる。しかし私には解らない。誰か私の疑問に付て解答を持つて居られる方が居るならお知らせおねがいしたい。」

どちらも話題が猫の目の色の様に変るが、ワンゲルも最近ではどうやら感傷を見せ内面

にも外面的にも適當にまじり、まじり一級と云う所で此処から、どの様な進展振りを究めるか察してみたい。今んたが部外者の様なことを云つたが、しかし今年の方針としては体育的な方向に、即ちワングルはあくまでも体育をする場所であつてその他の何でもないと思つてゐる。目的は一つである。

今年も新入生諸君が各人様々な夢を持って我部に多数入部された様子だが、ある人は部の方針を見て満足され、ある人は失望されたことだろう。勿論何も感ぜない人は論外である。だがかりに失望した人が入部した人の六十名あつたとしても部の方針を変えるわけには行かない。と云ふのは此の方針で部はガツチリと回まつてゐるのだから余らさどうにもならない。

出来得れば次期のリーダーである諸君が我々の方針を良く理解して部のために又自己のためにつくされんことを切に望む。

は大和上市―新川―山上が嶽―彌山―前部―水。本と云ふ此のコースではお袋のコースだ。しかし時候が時候だけに心配もしたが若さにはまかせて出かけた。二百百の山上が嶽と彌山の所で丁度雨がふり出して来た。朝から曇つていたので降るとは思つていたが案外早く降り始めた。十一月の雨は又特別の冷たさで全く話にもならぬ大粒の雨だ。まず雨の大きさに我々は驚いた。それに荷は平均大買程度、雨の中を思う様にビツチも上らず、その所に雨が募れてくる。雨は増々激しさを増してくる。体は冷えてくる。悪条件が重つてくる。その時に日は完全に暮れてしまつて、あたりは真暗。雨は相変らず降り続けられている。此のような登山も数多く行つていれはあつた。

又此れは昨年の十月酒沢に行つた時コースは大坂―京都―松本―上高地―横尾―酒沢、此れも一般コース。洋川の川岸をバスが走り

なんどか話が変な方に向いてしまつて、こんなことを記する気は全然なかつたのだけれどもどこで脱線してしまつたのか知らない。とに荷我々は山に登る。そして真心の練習につとめると共にそれを通して青春をエンジョイすることだ。

即ち余力のある登山をすること。これだけ成績自分の体力の限界より少々上のことをする事によつてそこに進歩も現れると云ふものだが、我々の浅い経験から通して見るにやはり快適な登山は自己の能力に近づいた山に入り、自己に近づいたコースで、自己のペースで行くことだ。

これは口先では大変簡単だがいざ山に入ると仲々実行出来難いことだが、特に新入生にこのことを望む。こゝで我々の未熟だが体験談を一つ二つ紹介して置こう。

我々が未だ一年生であつた年の十一月に近畿の屋敷大峰山脈の奥駈けをやつた。コース

鐘トンを抜けてまもなく標高連峰は真光に目に入る。新雪のふぶつた道。何とも形容が出来ない変だ。酒沢入りテントの中からは満月の月を眺める酒沢のカールの奥中附近で新雪の前穂北尾根の上に薄雲の藍空の中に満月が。月光が昇り上げる奥穂の壁を照らし全くの庄観だ。

此のような登山もある。即ち我々の登山の成功、不成功は大部分天候に左右される所が多い故先に述べた此に我々な登山する場合にはもう少し天候について勉強する必要もある様に思われる。右の二つの例も多分に天候に影響をされてゐる。何かが意味のわい様な事はかりならべて書いてある私でさえも知らないのだからこの文を讀んでくたさつた方々には何んが何んが解らないのは当然だがまあこれも最期の題が思ひつた雑感とは。

本當に雑感で何のまじりもなくなつたが

これもいわば「始めに調あり」という所か？

## 夏季合宿に

### 感じた事

小滝正行

夏季合宿が七月十八日より妙高高原に於いて盛大に挙行された。参加員三十余名。内女子二名。滞在日数。三泊四日の山の自由な仲間としての四日間を過ごし、四休生活の素晴らしさを味わった。……しかしこれは新聞用語的な文章である。これでは合宿という特殊な形態を解する事は出来ない。全く部に於ける四休生活へ主体となるのは合宿形態をとり、部会(多い)とは或程度部員の趣味という点に於いては共通するものを持つているが、そこに求むるべく何ものが個々人に依って異なるものである。その互に異なる個々人から成る団体においては何々人の個性と寛容の精神が必要であ

らる。それによって他方面からも自分等からも充實した素晴らしい部へすなわち集団社会へは出来るのである。そしてこの個性と寛容の精神はそれを組織付けている所の部の成員の別によってその精神が異なるのが当然である。そしてその成員の理解が必要なのである。すなわち、下級生の取るべく態度、行爲、それに対する上級生の態度等は集団社会を運営するにはその性質として強制なり威力というものが必要であるので、その意味で部に於ても回生別の取るべく態度が自から定まってくるはずである。以上の様な矛盾を通して合宿という面を見る必要があると思う。つまり合宿とはこの様な集団社会の運営がスムーズに行われる為又行方為に取るものなのだ。

そしてこの合宿というものが各個人の精神面にまでも行き渡る様な行爲でなくてはならない。

以上の様な概念が統計付けられ、又これ成

運営される所に合宿という各自の理想像が置かれるのだと思う。又この様な性質をおびた合宿というものはその運営面に於いても常にその急務を期すべく話し合いが取られ、それを取られる事に依って種々違が発表があるのだと思う。合宿という形態をこの様な立場から考へるのが当然ではあるが、しかし客観的な立場から見た場合にはおよそこの様な形態は回生が取られていない部に見える場合を重に想像せられていく様である。すなわち合宿とは名目ばかりで、その内容たるや街の悪運隊の奇り集りの様でそこで話し合っている事は正常なる感覚では聞きづらひと思える様な場所であり、その様な集団社会であろうと観られている場合が世間にある様である。この様に合宿というものが観られているという事は我々にとって非常に残念な事であり、又その様な事があったならば当然の義務として更正しなければならぬと思う。

物で、この様な観点から夏季合宿をみると、術得出来る面も多々あるが術得出来ない面も少なからずあった。つまり技術面から云えば、二回生の立場として一回生の人数の少なかつた事もその原因に教えられ、二回生に於けるウエイトが重過ぎる様であった。今此突で使用している二回生と云う言葉はワングル生の二回生という言葉である。後校における二回生も一回生も部員に於いては何らひかわりないというのが部の活動方面に部都合なのである。勿論これは部の活動面のみである。そしてそのワングル二回生に分当せられる重量が過剰であったという事である。そしてその結果は合宿が始まる時と終つた時に技術面に於いて種々差が生じ、二度、三度と回生の結果が現われると思う。故に一回生は自己の技術の練磨の為、すなわち部の技術の向上の為、常に主体となり行動を取る様、心掛ける必要があると思う。勿論二回生、三回



生もこれにあまえてはいけぬ、我部に於いては、他部に比敵すと可生別の人数が少なすぎるという事、つまりワングル業主以求まじ二年余りレが過つていないと云ふことよりこの様な現象が現われたのだと思ふ、つまり現在の部会主以来、現在にまでその発展と共に歩んで来ているのにおもに二回生である、その為には自分のクラブを思ふが為には自分達で



# 立命 W.V 創立小史



(21)

鎌田 克則

今度、機関誌発刊に當つて、私は当会の創立事情を書きとどめておこうと思ふ、今度当会は益々発展しより輝かしい歴史を積重ねて行くであらうが、その出発点をまだ創立者達は存留してゐる前に記録にとどめて置く事は

何をさて置いても重要だと考ふる、それに当会の今までの発展過程を見る時、あらゆる面に創立当初の気風が透つており、又他方当会の行き方、ワングル本来の姿を探究しようとして、その困難さの故に更めて我々の会は一

体どんな考えで出発したのか、と云ふ問いに立派な事も多い、そこで創立当時我々が意識したものも明確にしつつ当時の模様をつたない文ではあるが知る者の羨望として記してみようと思ふ。

当会の創立日は一九五六年四月二十七日と記憶する、その日の朝、ワングル会員募集のビラが四千枚はらまかれ、ホスグー十枚枚が校内にはられ、正午から研心館北側のベンチで受付が始まったのである、続々の申込者があり、三日目には百名足らずとなつた、正に大成功である、しかもその企画準備一切をしたのは当時本学法学部に入學して二週間目と云ふホヤ／＼の新入生、大野照夫、橋島俊平両君、それに私の三人だったのである、この事だけは譽つて良いであらう、三人共高校が可成りであり、私と橋島君は山岳部で、大野君は生物研究部で各々活躍し度く知り合つた仲であつた、そして私がワングル創立の構想を

入學と同時に所君に持ち掛け協力を得た結果今見るワングルの創立の一步が踏み出されたのである。

さて次に私がワングルの構想を持つに至つた動機について記さねばならないが、それは全く個人的な事情に増を添えている、先に述べた様に私は中等時代より山岳部に在部して可成りの活動をした、しかし私は常に「豊よ治よ我は猪り」の理ではなく、今から思えば多分にワングルの山行が多かつた、大學に入つて当然山岳部に入るが否か迷つた、以前の経験から大學の山岳部について一応の知識は持つていたが、それだけに私は素直に飛び込んで行けなかつた、その理由として先ず相手の体力が必要な事、時にはアルピニズムの常として危険な登山を行なわねばならぬ事、団体を構成している以上個人の自由活動が抑制される場合の多い事、大學の勉強と両立させる事の困難な事、相常に費用が掛かる事等

(22)



あつた。勿論山岳部としては当然の事であつたが、これまで六年間の部生活に可成り飽きず来ており全然変わった事がしてみなかつた。それで思いついたのがワングルの事である。ワングルについては距離と車馬から読みとつただけの知識しかあつた。それで私は今述べた山岳部の行き方と全く正反対的な解釈を施してみた。師ら体方は要らない。誰れでも参加出来。野山を歩いて一切危ない事はない。町体による規制はなく好きな事が出来る好きなもの集りであり。趣味ともから合わず。金も掛からないと云つた同好者の会であつた。正直に云つてこれが私がワングルに寄せた最初のイメージであつた。この構想を立てたり崩したりしている中に段々まとまりその考えを所長の協力を得てプリントし。入塾して二週目の朝。三人は校阿前ではにがみなぶらぶらをまいたのである。一言で云えばそれだけの事であるがそれまでの準備には可

成りの苦勞があり。申込者が殺到した時には感激一入であつた。さてその宣伝文句であるが、これは当時我々の考え方を如実に表しており。又当ワングル会にとって广く文藝とでも云えるものである。ここに全文を掲げて見たいと思ふ。

二年余り前のものであり。以後色々と考え込んで来ただけに全く幼稚で恥かしいものであるがその意味で記してある。

皆さんが今度一両三の者が数人集まつてワングル・フォーゲルと云ふ新しいクラブを結成しました。

ワングル・フォーゲルと云ふのは渡り鳥の意で青年男女が簡素な支度で野山を渡り鳥の道に渡り歩き、健康と生命力に溢れた人生の一刺を添へる運動で。ドイツに始まり今や世界的な運動です。

私達はこのすばらしいクラブを立命にも作り色々の楽しいスランを行つて。皆さんと共に

にこの大層な生活をより有意義にやり得るべくしたいと考えています。又このクラブはその性質から解る通り、試合など目標としたものではなく、レクリエーション。趣味を主体として自由な民主的なクラブにする方針です。

皆さんが、このすばらしいクラブに入つて日本國中を、いや世界中を駆けめぐらうてはありませんか。

以上の呼びかけに応じた学生は先に述べた様に百名近くであつた。さつそく次の日曜日

奥比叡登山計画を皮切りに。五月の連休は。原簿帳、おん／＼山。夏には妙高高原キャンプ。ピングトと調子足どりで急げ。夏頃には会の常連と称する二十名程の中堅会員が出来。嵐も全く出来上つたのであつた。当時の常連は現在三両三である永止。本所。西野。君等々の面々である事は云うまでもない。

さて以上が創立当時の概況であり。当時の遺憾のない幼稚な考えである。これ等の事

はやけり正しい記録として輝かしい伝説の裏下層に止まるであらう。今後益々発展せん事を心より祈つて筆を置く。

## 人物雑感

OB 福村 雅宏

これはクラブ設立当時から二年間、苦勞と共にして来た面々のスケッチである。見当違いのことを書くかも知れないが所違つていたらゴメン。全部員に送は、とても筆が及ばぬ故。他の諸氏についてはいさなれ又、稿を改めて書くつもりである。又女子部員には有名な奥の看板後く、それに女生の評論をする程の勇氣も資料も持ち合せていぬ故、これも後日にゆする。

永止 啓介

我が立命館大学ワングル・フォーゲル部を統帥

し、踊ら御人、又の名をマンレ大明神と申しはべる。即ちマンレ教の教主なり、いわゆる、道学。の大家として自他共に弄しているが、學生本末のつとめたる。等。の方に於いても地位の取り方など神技に近しい。又種々の悪み事があれば、彼に毒すといひ、親味になつて何故にのつてくれるだろう。

木所明夫。

一口に表現し難い性格の持主、つまり有機的な人格者。トッパン。カクカダ名が示す如く部員間の信頼は絶大である。標高のから三〇〇〇の道どこへでも、又何時の春節でも歩き廻れるだけの技倆を待っている。新部員よ、一度は彼とP.Wに出よう。何か得る所があるだろうから。

鎌田克則。

彼の外交的な手腕は大レミものである。それに身ぶり、手ぶりも交えて辯舌さわやかに一掃ゴツのが趣味と求めている。ワングルの対

外的な發展の爲に得難い勇である。小々舌言を呈するならば、もうすこし我を引つ込める事、強気一点張りには危険ですぞ。

西崎 博

彼は会計簿を持ってまわってきたという伝説がもつぱら信じられている。中学生的體からかつと会計だつたとの事、危に荷重い勇は、短し石部金吉に非ずあの方の融通はなかなかよく、陸上の長距離をやつていただけに、エグイコースを歩いてもめつたにバチには云わぬ。ファイターなり。

大野 照夫。

本名は照夫だが、現在はクマ夫で通っている。その名は身体を表わすのならば、よろしくクマ夫と改名すべきである。反面、大男にありがらの純情型でもある。柔道は自称三級公称二級。云うなれば気はやさしくて刀モテ、由ぶつひないのが不思議である。我と思はん女性は今の内にとらを。

指原正太郎。

彼の歌へ行つてベルを挿すと、まず母堂が出て来られる。それからおら真へ向つて、正ホーン。〇〇さんきやは、たえーとのおっしやる。彼は今だにボングのである。それでもデッカイキスリングをがっけたり、スキーをはいたりすればスゴイファイターである。顔色の悪いのは度々の山行きで白くなる暇が無いのであると本人は云うが、どうもこれは他色らしい。

寺沢 武雄。

体重三十数貫、身長一七五の豪氣風正の、その彼が或る日、それくさそらに、こんなことを云つた。其はなぬ、惚、恋をしてらんや。あ、あの巨体からこんな言葉が染せられた時を想像して頂きたい、彼を深く知らない者に取つては正にオドロキである。だがブーマンは本當に心やさしい男なのだ。へ人は見掛けによらぬもの……とはこの事な

小滝 正行。

歩く時のペースがめつほうに速い男。合宿の時など連絡係をしてまことに重要。万事に小まめな男である。ソフトボールとおしやれと乗り物と、それからガミツイ山行もお好き。昔言を一言、二本の足を大地にしつかりとつけて歩くことが、いままし必要である。好漢自愛せよ。

西崎 正紀。

西崎みどりの御令息と云つても充分通用する。レレやかの婦人物なれど、シマンと一本筋が通つている所など仲々大したものだ。彼の様な部員が揃えればワングルのも、もっと良くなるだろう。でも少々気が弱くて押しが足らぬのが玉にキズ、今一息のガンバリを。

若村 操夫。

宛に角細長い身長一七二の体重十二貫、光年の妙高合宿の時彼とブーマンが並んで歩く

と、あまりコントラストが良すぎで体重十貫の足とは二人半ものかじ、つくづく感じは次々、別名をホンカワヒ云う、由來は術の真中をハダシでのレ赤くくせが有るから、それに忘れてならないことは彼のツンツン峰と、すさまじく往復イビキである、是非一巻をおすすめする。

藤田敬澄

「いつもにこやかにレ彼のモットーらしい、とは云つてもニタニタではありませんが、石念の為「可憐」なる言葉は彼の為には作られたもの、標である、標の腕前は相若なものとのこと、自信のある方はどうぞ、好漢、惜しまらくは部活動への参加が少い、



一 宛

### ある過程から

O.B 戸谷 公 治

山脈がその堂々たる姿を武々の行手に磨けに横たえている。

我々は今その前面に牧歌的情緒を持って展開する美しい高原を肩に喰い込む重い荷にあえぎながらも例によつて規則正しい歩調で小径を一步一步とベースキャンプス地向けて進んでいた。

真夏の太陽は強烈な上に尚も強烈な光を我々の全身にあびせかけ降り注ぐ出る汗が取に入る。私は考えていた、一步一步と歩を進むがばら自分は何故この様な姿で重い荷を背負つてこの様に大自然への道を歩んで行くのだからかと、そこには何ら義務も強制もないのに、……然し考えながらも足はパーティーのペースに合わせて極く自然により高く、より深し知へと入つて行く、何かを求めて……

リーダーの「休憩」と云う合図に腰を解して一町先まで来た下方を振り返れば緩やかな野原そこに群がる人家や湖を抱いてまるで湖の帯に美しい、この様な風景は何度味ついても素晴らしいものだが初めて接するものにとっては事更印象的なものであるろうか光程のら盛んに汗を流すばかり「美しいなあ」と四方を見渡して「出巻」の音も耳に入らない様子である、それ程に自然の美しさは人間の眼を引きつけて放さない。

ベースキャンプス地に近すぎ先客隊が出迎えて来て呉れた頃にはあれ程元気だった新入連も夜汽車の波れと炎天下の重荷でいささかバテ気味で声はなく大自然への道がどんなに苦しく辛いものであるかを知らされた様でもあった。車上の箱の上では比鞍の騎手に着えられ居いけれども先客や技術上の種々の条件や河原もあつて実際に大自然への道はそれ程容易ではない、それには数多い経験によつて

除々に教えられ又自然味を合わせなければならぬ一つの過程であるとも云えるだろう。

ベースキャンプス地は完巻態の手によつて一屯テントの設営場所等整備されてあつた。設営隊は早速設営を始め食事はそのリーダーの指示に従つて各々手早く前を開始した、残りの者はそれらの仕事を受持つてプラスチックでいる者は一人もいない、勝手の良く判らない新人連にもリーダーから次々と命令が飛ぶウロウロしている事が許されず合宿らしい風景の中で着々と準備が進められて行く。

全員一致協力して荷物を運ぶ程美しく素晴らしいものはない、そうする事によつて合宿の意義を高めるのであり、又山に於てはその協働性が最も要求されるのである。大自然の中に於て一分の断断も許されない、その点に於てパーティーに協働性のない程不愉快なものはない危険なものはないのである。

山の日は早、夕食後リーダーから明日



の行動計画の急表がありコース等についても詳細に説明が所つて、この類編時には各々入念を以て置く心掛けを忘れてはならないと感ずる。万一の危険に備えて……

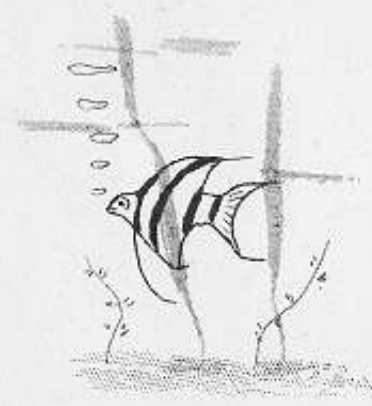
夕町近る頃各々のテントに入つて各車置位に共通のテーマを決めてミーテングを行ひ、活な意見の交換が行われた。合宿者に於てこの旅に共通の立場を導いて技術向上も危険防止その他新人等パーティーの聯合を計る爲にもミーテングを行う事は絶対必要であり非常に有意義な事だ。

私の抱いていた大自然への疑問も自由の意見の交換によつて段々と消られて行く。都会の真中でこれ等の事情を都合よりみれば實際にこの様な場所を話合ふ方が真に違つて現実的である。

大自然への道がどんなに辛く苦しくても我々はその辛さや苦しみを求め味合ふ爲に明日も又より深くより高い処えと入つて行くであらう。

らう。そこにはもう大自然への疑問はない。大自然に眠りはないが幼い子供が母の胸に抱かれて眠りの世界に入つて行く如く、テントの灯も次々と消えて我々も又大自然の胸に大きな希望と幸福感を持つて抱かれ満足げに夢の世界へ入つて行くのである。大自然への道を歩む全ての者が考える様に我々も又明日の天気を気にしなばら静かに眠りに入つて行く。限りなく幸福だ。

(三十二年夏季)



# 田 等 寝 台

## ◇ 大峰山脈で ◇

下市——河川沿のバスで車に乗りこき早くも酔つて真青、それを見ていた下・F・Nの番々「豚の白味、ペーコン、ハム、油あげは如何れと意地の悪い事を云つてイジメているうちにいつのまにか自分達も胸が悪くなつてグロッキー。

## ◇ 木ノ本で ◇

街の中をワンデリング中、平凡な民家の塙の中に一軒だけナマメガシキ紅燈をともした三流旅館の家へ十三階段とは云わすもがなしを見つつけ、さすが道のN氏もニの匂が出す。後程曰く「おんお所にP屋こしらえといだら風紀が乱れるがな」。

## ◇ スキー列車で ◇

おなじみスキー列車の寝台はシーズンともなれば日本中で見られる光景。二、三に大糸線で拾つた関東人、関西人の気風の違いを述べてみよう。

「居ても日本人だらう。日本人なら日本人町志もつと助けあつたらどうだい、話めろ、何してんさい」

「こらバカヤローもつと話めやがれ、何さあしてんね、乗れへんやないかい、ホヤクしてやがつたらハッタオスゾー。お前らと同じ乗車賃払うとんやぞー」

とちらもどちら、大した面白い文句である。

## ◇ 松本 駅で —— 暇には暇を ——

一月、唐松岳登山の帰り松本で休憩し、さて帰ろうと駅迄来てみるヒスゴイ寝台で遂に寝込みを喰つた。

【以下三十三頁へ続く】





北山にウンテリングした時のこと、味を一つ越え二つ越えして来た。都から程遠い山村にさしかかった時、学校帰りのボン数人と仲良くなった。

ボン等曰く「おっさん等何してはんのやし  
小生曰く「おっさん等、先主で先主だけのハイキングに来てるのだよ」

ボン曰く「今日、土曜日やで、先生はこの日等、土曜日も休みか、エ、ナア」

一同オククン

どろにかこうにか、あいつが算数の先生、あれが国語、社会の先生と知らぬが私の小生主に、いっかどの先生気取りで……

(西野 博)



## 黒部軌道トンネル スリル満点記

剣めざして裏から入った時、峠平から所管原迄約六キロのトンネルを歩かねばならない。と云うが大キレットそのけの地中の大スリルを味わった。

兎に角、フルスピードへあの時は時速一〇〇キロの車より早く思えたのでやって来るトロッコを避けねばならない。

三、四十秒の中に

ザックを背負ったまま、なら脚底じゆう受け合いつてがトンネル、岩壁にへばりつき、時計を飛ばし、ザックのはれトロッコとすれで「パスッ」という音を聞きつゝ、腹は運を天にまかせた次才。

(西野 博)

## にわか先生行状記

【三十頁よりの続き】

次の汽車はサツと三時前降った所でヤコヒガ空きの列車がやって来た。と同時に大町の方からもスキーヤーを満載した電車が来るではないが、そして、電車は電車より早く着いて呉れ、と必死に念じる我々の期待は空しく裏切られ、電車の方が一瞬早くつたのである。こいつはタマランをも思ふ向もあらはこそ暴徒の群は我々の列を引けて殺到して来た。等こゝに至って我々は生存競争のスタート台に立つた事を痛切に認識したのである。我々が寒風下三時前を極当にして得た利益をジャヘルゼンとすれば是非合法も亦止むを得ない。かくして群衆が我々の列をあわやモミクチャにせんとする殺那大音声には自信のある丁ヒNがおよそ此の世に存在するありとあらゆる罪深き言葉と能刀の針を振り回すにワメイだのである。その恐るべき怒号は松本駅構内の隅々に遠まき響いた。一瞬ザワメキは消えて人々

は理性とも云うべきものを取り戻したのであつた。かくて悠々と列車に乗り込んできた我々は「日本の公衆道徳未だ滅びず」と大いに氣を良くしたものだ。

◇高山線で

豊津駅でステーションホテルと新築こんだF、N、T、Aの四人シエラブにもぐつたが早朝異様な気配に飛び起きると、近在の爺さん、婆さんが始発の汽車に乗らんものヒヤッて来てベシチの上に横たわるゾルカイ四匹のイモムシにびっくりギョウ天、恐る（手を取られたものと判って大笑い）。

◇北陸線で——上方才的妙味——

大森の臨時列車全旅行の購買の手前がダイヤ混乱から三十分程停車、その間ヤキモキする乗客を尻目に定時列車が二本通過、一杯キゲンの行乗客、窓を叩けるなり購買に向つてがなる。「又、ガレてはっかりやないか、一遠く歩いてみてみよ」。

忘れがたき人々

——大野 照夫——

(一)

〇時何分かの銃行で熊本を去る。頼みさの空腹を小かたて目的地の指宿駅にヤコヒとどり着いたときは、登に少し前であつた。さういふ強い前風の騒ぎしを真下に受けて道隊は白く乾燥し、小さな砂がキラ／＼と反射して、まぶしく目を刺した。

駅前の中夫に作られた花壇には、英雄の首の花が青面を代表する様に咲き誇って居るのが一際めだつて見えた。

今日のデント感に行く途中の路端にある涼しい水陰のもとで朝昼兼用のパンを食べていると、近くで遊んでいた四五人の子供達が寄つて来て、珍らしい物を見る目附で、遠慮のない視線を、を食阿茶と進行のなかくてもはなは

だ無気な我々を取り囲み、じつとにらんだまま離れようともしなかつた。真裏に驚嘆した彼等の体には汗が滲み、それをぬぐおるとむしなまま、砂埃にまみれて、メリケン粉を撒かれた様になつてゐる。

口にははつてゐるパンにも気ままりが感じ悪いをして、側の紙袋よりもう一酒パンを取り出して、褐色の顔に大きな涙をこんと前に突き出しチッホケな男子の象徴もなにわせん。オールもき出しの真標を前風の直射日光がまじもに受けて旗天国を専断している天心から人まんの愛敬のある年下の子供に向つて、パンと交換条件で「のり海岸はこの道を旗すぐ行つたらいいの」と聞いた。急に呼びひけられてはつと驚ろいたその子供は前に二つくりうなずいて、ニミ歩近づくヤパンを両手でしかりと握るが早いのが歌声とも似つかぬ声を上げて青田の続く白い一本道をばた／＼と走り去つて行つた。

その動作が滑稽だった。その子決意との対立が熱くなつたのは、僕等は大いに笑つた。

この九州旅行で僕等は所々の風物に接するのみで遊べども気安く語れた事は無い。汽車中の席も、テントの夜も常に三人の会話で終始していらつた。沈黙の時も多く、そろそろ旅悲なるものをお互に感じていたのかも知れない。その様な時、この子供等に対する僕等の近親感、大いに激怒を覚めて呉れまふりなりにも話す機会を持ち解た事は大きな喜びで、姉に手を引かれて、にっこりと笑つていた。あの愛敬のある子供の顔は旅の夜を遠のかせた様だった。

(三)

僕が徒歩で京都から日本海へ抜け出る事を思い立つたのは、ワングルが出来た頃からのささやかな念願だった。

当初は漠然としたその旅の計画は無い。

僕が徒歩で京都から日本海へ抜け出る事を思い立つたのは、ワングルが出来た頃からのささやかな念願だった。当初は漠然としたその旅の計画は無い。僕が徒歩で京都から日本海へ抜け出る事を思い立つたのは、ワングルが出来た頃からのささやかな念願だった。当初は漠然としたその旅の計画は無い。僕が徒歩で京都から日本海へ抜け出る事を思い立つたのは、ワングルが出来た頃からのささやかな念願だった。当初は漠然としたその旅の計画は無い。

近所で確めて一行五人ドク／＼ガチャ／＼と山門の石段を登りカックを本堂の前に置い

ランには誰れも来る者がなくお流れになつてしまつて、そして又二年目になると皆な剣とか槍穂高ヒネムバリーのある山へより高きより困難を旨指して出向き、この様な計画には見向きもされなかつたが、いかなる風の吹きまわし十一月の等圓祭には四人の同行者が集つた。最低の費用で行く事をモットーとし宿所は無人小屋又は神社仏閣民家、学校で泊り、坂を渡れた時はヒッチハイクを利用する事にして、三日後には着袂の海水拜めるのであるとの計画で出立したのである。

大原を過ぎ比良を渡り安曇川より北に橋木峠を越えて今日は四日目予定の行程は九分通りに終り阿朝には小浜へ出られる所まで来た。一行は夕闇せまる山合の道はせわしく重い足を引きまくりながら今夜の宿所のおても無く歩いて来た。

秋の日暮れは早い、暗るい内にどこか良い所を見つけて出さねばと思つていたので、

僕が徒歩で京都から日本海へ抜け出る事を思い立つたのは、ワングルが出来た頃からのささやかな念願だった。当初は漠然としたその旅の計画は無い。僕が徒歩で京都から日本海へ抜け出る事を思い立つたのは、ワングルが出来た頃からのささやかな念願だった。当初は漠然としたその旅の計画は無い。

近所で確めて一行五人ドク／＼ガチャ／＼と山門の石段を登りカックを本堂の前に置い



懐かかった。一旅籠ももどき。一は、  
金が無いとは云えず歎かす。

とやかく云つてゐる間に我々を元の寺と認  
つたのか、おばさんは「まあ上りなさい」と  
本堂の端にある奥の院に案内と呉れやうと治  
れる者になつた。

今から思ふと佳耶との会話は冷汗ものであ  
る。しかし晩食の用意に台所で飯を共にしてい  
ると水がどりの。この水は新米のとうろくさく  
付きまとい、わしも昔東京迄無銭旅行を試み  
たが失敗して帰つて来た。息子には山手野に  
入れると以前とはガラリと變つて元の懐しい  
所をふるまつて呉れ、ぐつと打ら解けぬ。こ  
ちの古い畳の上で虫の鳴き乱れる静かな眠り  
に入る者が出来た。

翌朝五時にはあのいぶがり坊主の木庵を叩  
いて幾む義経にたはき起されたが、おぼさん  
の腹がい心づくしの山甘藷のみそ汁を食べ、  
秋晴の道にいつの日か又機会あらばと感謝の

恩をこめてこの寺を後にした。



## 五月の穂高

猪原 正太郎

五月の中旬ともなれば都は初夏に入るが信  
濃路はやうと長い冬の眠りから開放された感  
じである。上高地の五月はすばらしい。若々  
雪、新緑と空の青さ、それに梓川の流れとが  
コントラストして別世界に来た様である。

まだあけきらない島々から一路上高地行の  
バスに乗った。右左に感ずる梓川に沿つて  
悪路を通る。車内も何かの人がりした雰囲  
が漂つていて都参入にとつてはそれだけ特  
分のよいものである。お客は十三、五人でその  
大半が土地の入りらしく話す言葉も独特の信州  
べんである。バスもだん／＼峻しくなる山道  
を梓川の溪谷を縫う様につ。走り中の窓から

編トンネルを出た所から雪も相せ多く残つて  
おり、梓川の透明度が急に良くなった。それ  
は中の湯から直泉の湯の川に入りへこの源泉  
は硫黄のエロイドが入つてゐる。白く見える  
のである。これは先輩下氏よりの受売りであ  
る。この川は何度見ても良い川である。この  
美しさを何と表現しようか「氷壁」の中で、  
魚津が小坂の妹に言つた通り梓川は日本一美  
しい川である。

上高地に着くと十数時前を乗物でクタク  
タになり、やれ／＼とバスから降りると朝飯な  
ど食べられたものではない。天候が良ければ  
見上げる前穂、真穂、西穂と岳沢の堂々たる  
風格を見せてくれるのに、今日は主峰台いべ  
ールに包まれ私の前に姿を現わそうとはして  
くれない。夏になると上高地小泉平ではマン  
ボヤ流行歌が鳴りアロハ族のアンチマンボブ  
ラ／＼歩き回つてゐるが、今はその様な季節  
が来るのを忘れた様な静けさであり、小鳥庭

も表世の楽園とはかり違ひ散れている。今は  
霧で見えない穂高の山々を想像しながら歩  
いた。高山植物のお花畑はまだなく、二輪車の  
白い花が所狭しと咲き居る新緑は特に印象  
深かつた。その町に徳沢園に書いた。徳沢園  
のりさんとは知りあいだニケ月ぶりに逢つて  
驚いた様子である。まさか今頃に来ようとは  
ヒヨロ様な表情で出迎えてくれた。それもそ  
のはち出逢する一運阿前に、ハガキを送つた  
のだが郵便局がまだ入つていないのが原因で  
連絡が出来ていなかったらしい。夜行の疲れ  
もストーブを囲んでのお茶で途端に元氣にな  
り山の気分を満喫させてくれた。まだ夜にな  
るまでには相当時間がありりさんと岩魚釣り  
に行つたが増水していて梓川で釣るのはよほ  
ど釣天狗でないのだと云ふことで真又の  
谷に入り糸を垂れたが何時間しても釣れる様  
子もない。早々に引上げて来た。その日は徳  
沢園の風呂に入り雪の向々に見え隠れする真



又白を見ながら次の段を拭き拭きつた。夜に  
なる。明日の天気を見まわして、来る程の重空  
となり時々風に乘って霧が流れて行く。五月  
と云えども夜になると相当に寒くストーブを  
囲みながらのさんや下さんらと飲談し、都合  
の雑音の中から逃れ山の一晩は私にひとつて楽  
しい夜であった。

翌朝早くから起き外を見ると昨夜の重空は  
どこへ行ったのか又霧が強風に乗って流れて  
いる。五月とも思えない寒さだ。この調子な  
らば洞沢は多分雪だろうとの話である。もう  
一月後沢でも凍った日が数回の間際までそうも  
していられない。七時に徳次郎を出発。遺物  
相当に荒れていて巨大な岩石や大木が無造作  
に倒れている。梓川はます／＼登みきつて清  
らげである。裏又白との出会いまで来るとだ  
ん／＼霧も登つて行く。そしてオスの河から洞  
の東登り一部分が見えて来た。この洞子では  
昼の晴れるな／＼と思いつつ歩いた。屏風岩

てくれなかつた。翌朝昨日の悪天候も忘れた  
旅に雲一つない快晴である。その日の計画は  
スキーをする予定であつたがあまりにも天候  
不良いので変更して真穂高まで登ることにし  
た。ここ洞沢は長い冬の賑わいから覚めていな  
い。雪も深くまさしく静かであり、吾性約な  
徳高の岩峰が嶺上に聳え立ち、春が来たのも  
まだ知らない様子である。  
少し非常食と熱いお茶を魔法びんに入れて  
カックに詰めこんだ。アイゼンを履きヒック  
ルを持ち小屋を出た。重道は岩小屋の橋を通  
りザイテンを登り徳高小屋に行くのだが雪が  
多く、何の障害物も無いので小屋から直登し  
てザイテンに取りつく。雪は相当にクラス  
トしており歩き良ければ昨日の新雪が少々積り  
時々雪がそれほど苦痛を感じるほどではない  
ザイテンの末端まで約一時間。ザイテンは雪  
が少く新雪だけ少々積つていて苦しい登は  
人を続けた。そのうち徳高小屋にヒビリ着い

の雄大な岩峰を更上げながら行くと標尾木谷  
の丸木橋があるが、その橋がスノースリッ  
クになつていて、それより奥は完全に雪に覆  
われていた。レクレバスもまだ出来てい  
ないから洞沢に行くには完全に沢を歩いた。  
霧は晴れようとはしない。時々強風と共に霧  
が流れる時河が一瞬見えるが又一面白一色に塗  
り潰されてだん／＼寒さも増して白いものが  
急に降り出し風は一級と強くなつてくる。雪  
はます／＼降る。自分がある場所が全然わか  
らない。雪の深さの上に新雪が積り、それゆゑに  
まつわりつき歩行も困難となり、背のリュック  
もだん／＼重く感じてたが登ることは早く  
洞沢小屋に着くことのみである。附近には誰  
一人として居ない。孤独感と自然が人間に対  
してあまりにも冷淡であることによく感じた。  
雪と強風との悪戦苦闘もようやく小屋にたど  
りついた。その日は北穂沢のオウルシエウまで  
行ったが北穂沢の急。山は何の誇り感も与え

た。徳高小屋は完全に雪にうすもれ屋根の一  
部分だけが露出していた。そこから頂上まで  
の尾塔の悪い岩場をかえさ／＼登つた。岩  
には氷がはり急な雪道を降り緊張の連続であ  
る。そのうち頂上に辿り着いた。その時の感  
動は夏山の喜びと又一種変わったものであつ  
た。

裏銀座 行記  
寺沢武雄

銀座と云つてもこの銀座には円タクが通つ  
たり、喫茶店やバーがある所ではない。雨が  
降つて来たらびしょ濡れになる。  
たとえ七、八月の暑い盛りでも寒さに歯の  
根が合わなくなり、最悪の場合は凍死寸前の  
状態にかるまで凍りこまれる。

どんなに良い天気が続く日でも將其の用意を怠れたら暗い日に合ふ。  
銀座と云ふ言葉に決断したらとんでもない向直りである。

高嶺子岳(二六二七m)、三ツ岳(二八四四m)、野口五郎岳(二九二四m)、警打岳(二九二四m)、三標連華岳(二八四一m)、槍岳(三一八〇m)にいたる山稜は三ツ、四ツの標高を保ち登山道は明確につけられているといつても猶岬の上り下りで特に野口五郎岳からの下りから水尾岳から来る急走路にいたる登りは前者に困難な岩尾根だ。

それに双六小屋のらの目前横沢の上り、宮田新道との出合から続く西尾尾根などは名も高いやせ尾根である。我々の場合はテントであつたが、途中の山小屋を整備されているから軽装で水ける。槍ヶ岳は北アルプスのシンボルである。山に憧れる人々なら一度は登つて見たいと登行欲の出る岩峰だ。

此の折物で此の森り、丁度三時点を過ぎた頃から休息時間と行脚時間とが同じ程度、五時過ぎまで歩き過ぎ鳥帽子小屋に到着。直ぐ小屋の裏にテントを張る。夜食は予定通りと云うの岩石通りカレーだ。食後テントの中に入った。マルススオ一夜としては少し薄が過ぎる程だ。

オニ百目は朝から雨が激しく、テントは叩つてくるし下は少々しめつてくる。昼前になつて小降りになつた頃出発した。今日の目的地は野口五郎岳のテント場だ。レクレエツ岳の真下で又しや風時強く全く動けない。此地に於て初めて突風と云うものに遭遇した。又雨は上から降つて来るものと思つていたが山に於ては下からでも所は降るものがある。五三〇メートル初めの経験だ。そして又鳥帽子小屋に逆戻りして、その日は小屋に宿泊した。岬の音がトタン屋根に響つて大きな音でして履れない。

此のシンボルと仲良くしようと思えば一般コースとしては北アルプスの玄府でもある上高地、横尾からのオニコース、裏銀座に対する表銀座コース、駒ヶ岳からのオニコース、それに裏銀座コース、と大体三つある。その他にも高瀬峡谷から先に述べた宮田新道と標高(北麓)から来るコース等数々あるが一般的に初心者としては前の三つのコースである。

何れが前置が大変長くなつてしまつたが我々は七月のはじめ、元気に大町駅前から七倉行のバスに乗車。それから、湯の小屋まで二時間、杖木の上を右に左にと高瀬峡谷を渡りながら十時前に鳥帽子岳登山口にはつきり書かれた指導標を右手に見ながら八貫五百のザックで、パーティーは戸谷氏と小生の二人、空は曇勝ち、曇り道は相当なもので、まるで崖をよじ登つていく様な状態で、二人とも完全にグロッキーだ。

オニ百目は昨日と打つて違って好天気、朝早く元気に出発する。昨日突風にみまわれ三ツ岳直下も何もなく通過。野口五郎岳附近では岩とハイマツと残雪と妙な三重奏に迎えられる。雲表登山の気合満点、右手の下の方に五郎池が見え行けども行けども五郎池が見えていてなかなか進まない。まもなく下りにかかり水尾岳へのやせ尾根に絡む。此地でも又グロッキーだ。

やつと尾根にヒリつき此処からは槍ヶ岳と似た道で右前方には黒部五郎、黒部、雲の平が正面には鷲羽が左前方には表銀座が、それぞれ特徴のある姿をして、五時過ぎに三標連華小屋に到着。小屋前の岩場でテントを張る。

立山方面が曇赤な夕焼け空で何と形容し難く良いのが適當な形容詞に苦しむ。ハエマツ怒りに槍の穂が見える。天気は良い、本日は全くすばらしい一日であつた。昨日とは雲泥の差だ。二人な事があるから山行きは止め

られないのだ。幸四百回は我主の予定だ、それにしても又空襲機が怪しい様だ。

十時頃頃から降り出して来た。双六岳頂上付近では本降りでも全然止みそうにもなぬないので、わざわざ双六小屋に流シテ午後四時頃頃から降り、次々に雨にぬれた登山道が小屋に到着してぬれた衣類をかきかきしている。夜になってもなかなか音は寝ない。我々は昨日午前四時の出発の予定であったが、これでは無理かも知れないと相談しながら、レガレニ時頃言葉を交まし朝食をとって予定通り四時に出発した。

その頃よりやく小屋の人々が起き始め、お早いですねしとさむも悲願、そこに云っていた。可前の探検を懸念待望の繪岳に合する予定で足よりも早く、宮田新道との合点突然襲って来た雲河から槍が頭上にか。まさに感激的ない。しかし直ぐ又雷がいじ悪くも我々から感激をもぎとってしまった。西嶺尾根に探

り、途中でさえぎられ何も見えぬ。

千丈の雪道を眼下にみれば、ヤセ尾根は足場が滑りやすい岩場で、右手に瀧田川の右保谷が見える。頂より槍が岳への急傾斜に掛る。此からの小槍が又所縁的だ。雲が切れて又槍全体が浮彫された様にか、大槍の上に人が何人が登っていて、何か盛んにわめいているのが見える。

十時四十五分頃の小屋に到着、林も向もななく直ぐに大槍に向う。途中クサリ場を二分程ストツス、十時八分二十七秒我々は三、一七九のの大槍をレつかりと踏みしめ四方を見渡し、立山連峰、初め南の方向では、徳高峰様々な山が見える。レガレレ登っていた時よりも、現在写真を見ながら机の上でこの様に原稿を書いている時の方が不当の意味に於て感激がある様に思ふ。昼食後槍天の雪道を下って此処でグリセードをしている者も沢山居た。此の雪道では意外事故が多らしいと肩の

おじさんがおしして居られた。此の下りて足は完全にやられ荷も相當に肩に喰込む。

徳高小屋を過ぎた頃より疲勞度益々激しく、一俵附近で一休みした。梓川の川市も相當に近く、対岸の嶺尾根の中岳と南岳との嶺間にまで伸びている。嶺尾根迄来るに夕暮れも近く、あちこちで夕食の煙が立ちあがっている。本日の手定は此處であつたが、雨日の都合上、高地逆行くことにした。五時に嶺尾を出発して徳高に向う。細い道で未だレ、沢山嶺尾に入る人が居る様だ。

徳高についた頃は、あたり一面に雪を流した根に夕靄が立ち込み、小屋の前の広場には数百のテントが張られ目を眩はるばかりだ。その後二時頃迄は疲れた体に云い前して又歩き出す。明神では完全に日は暮れ、たよりは霞だけ、足元は暗い上に水溜が方々にあり、林み込み上高地に入る。

小泉平ではいつもと変りなく雑音が耳に入

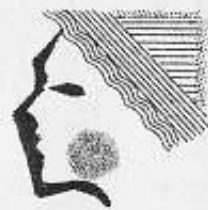
る。カッパ橋にびっぴと膝を下し、二人共お互に顔を屈合せ無言で微笑をする。全く良く赤いたものだが、あるとク。

今日はデラックツスに温泉ホテルに泊るか、相談はまじりそれから橋を渡って梓川沿に二十分、足をひきづりながら、普通道なら十分も掛るまい。ホテルの玄関に立つた時は本音に今日はこれで帰られると思つた。全く疲れていて言葉も出ない。食事もおい。全くのグロッキーとは此人の状態を言うのだから、女中さんに案内されて部屋に入りませう。

時計は丁度九時三十分前、まさに双六小屋を出てから十七時頃、正に強行軍、長い縦走コースもこれで終つた。後はバスで高々一松本一、大坂かと思つた。後はバスで高々一松本へ現在机に向つて此れを書き、時、やはり一番印象に残るのは西嶺尾根からの槍と嶺尾から上高地迄の雨を被った足でカッパ橋の上に乗る下れた時だ。



降りの晩車の中ではもう次のステーションを想試  
しなげら中央線からの山々を更つめながら  
明日は我が家か、寝にも色々と思ひ出されて来た  
ものどと初めて家のことば思ひ出されて来た  
今頃はどうしているだろう、両親も元氣も元  
氣だろさか、山の隅りにいつか思ふことが  
今度も同じ様に心によみがえって来る。  
阿タクや喫茶店のない表銀座より。



## 一人旅の 或る追想

西野 博

秋の初め頃、長い北陸東北の道の最後の日  
の事である。もうあたりは河人となく秋の衣  
で覆われている様にすがすがしい感じであつ  
た。嵐雲の一角小野川湖の小さなバンゲロ  
ーにその仮りの一夜を過ごした。

誰一人いかに湖のほとりに朝早くから飛び出  
し唯一人ローソクの灯を頼りに炊事にヒリか  
かつた。物音一つしなな静かな湖のほとり、  
ヒク／＼奔せる小さな波にローソクが淋しげ  
に自分の額を照らしていた。

響くして湖面から朝霧が立ち上り、紅葉と  
松の緑とがボンヤリその中から顔の毛がせ  
て来た。どこ迄もどこ迄も無意味な色彩であ  
る。これ程美しいエシガントな風景はないの  
であらうと我れをばし忘れた程であつた。  
さあ今日は最終日と云うので秋りの食糧全部  
を我が偉大なる胃袋君に提供して午前四時に  
出発した。

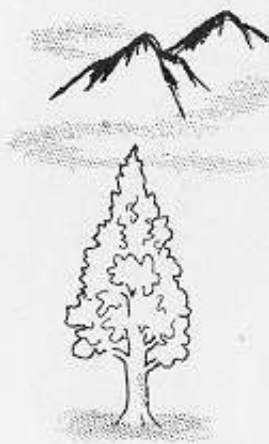
無料で行めて貰つた丸を述べ、まだ朝霧に  
覆われている道を二十ニキロ先の駅に向つて歩  
き始めた。

朝風を胸一杯に吸うと、昨日の事が色々  
腹裡に湧んでくる。夏が知らずの学生とあんな  
こと議論をしたナ、昼飯をくれたあの女学生

まはどうしているかな、と。

空は新焼けた炭に美しい、赤い土製の壺  
が漆岩が今でも流れている様に赤く口を  
いた、青々と盛み切った湖にボンヤリ映つた姿  
はまづあの瞬間を死な者のみを知る風情であ  
らう。

人一人っ子通っていない道を大きくも  
と、泉の木を見つければそれによじ登り、泉  
を取っては壁じり、手に持った切れない程アケ  
ドを取つて口にほろほろはつたり、グミを急ぐす  
ぎて口中シブだらけにしたりして、全く無邪  
気な一人の先に登標を下つたのである。今  
から思ふと全くよくあれ程自然に登りこんだ  
ものだと不思議な程である。



## 或る日の 山日記から

西崎 正純

前期の試験も終り、ほつと一息ついた。初  
秋とにも、すがすがしい。元気で、行きだ  
行きたいと思つていた上高池へ、四人の意気  
投合、十月始め京都をへびだした。その時の  
手帳をひっぱり出して、目を通してみた。

寒い、眼がさめたのも涙のせいだろう。  
ふと目を上げる、窓が真赤である。目をこす  
つてもう一度見上げる………どんよりと  
たれこめた雨雲に、ちらめしげに空をならみ  
つけながら京都をたつた四人のパーティー、  
それでも昨日は好天気にくぐまされ、大正強か  
ら、新雪の穂高に目をみはつたものの、この  
小屋に着く時分から、又空模様あやしくなり



だんどーとつゝの狂風雨に、明日は小屋に  
 荒波がとどろきしなむら、ねむりについで我々  
 にとつて、何んぞこの様な光景が期待出来な  
 る。ナオイ、起きろ、見事やぞ、——  
 オー、夜其から、むっくり出たむむむげな  
 顔が一瞬さっしひきしまる、……冷たい  
 隙間風に叩かれてつめ込んぞ吹く飛べり  
 た風、昨夜ヤカンに入れていた、お湯を水に  
 した寒さ、窓をはる、た、いたあゝの狂風雨  
 が雪に交り、近り一面の陰化れ、手をのぼせ  
 はとぎそらな所に、どっしりと構えている  
 徳島運峰もろ、すうと雪化粧である、この徳  
 島の壁に、はるか遠く雪海の上に、ちよんと  
 頭を出した富士山の嶺から、靄をのぞけた太  
 陽の光線が放射し、見事な輝けをこの小屋  
 の窓一ぱいに影じている、下取に居ては、ち  
 よと想像もつかぬ、我が下手くそなる文章  
 では表現のしようもない、大自然の現像は、  
 寒さも忘れ、雄見とれるばかり、山ならでは

の余しみをまぎと見せてくれた。  
 大庵小屋にて  
 徳島の秋晴れ、快晴である、ひとりでに口  
 から歌が出る、紅葉にはちよと早い、そ  
 れでも色づいていゝ、その上に、うすうすと  
 化粧した新雪、さくさくと音をききませなが  
 ら、歩を進む気持よき、天高く、紅葉はよし  
 、雪白し、……大庵から嶺へ全く快晴なワン  
 デリングである、——嶺岳頂上には、親切に  
 も立派な展望回入りの碑が建て、ある、この  
 展望図板に腰をおろし、この大自然の一大パ  
 ノラマに見とれる、澄みきった青空のもと、  
 秋の大光景すいこみ、宛念屋裏をパチリ、わ  
 ずらわしき下取のことなど、ヒんと忘れてい  
 る。  
 嶺岳頂上にて

らいてある、おきまりのカレで晩飯を食べ  
 早やめにテントに入り、ミエラブにもぐつた  
 。今日は皆少々バテ気味、よく寝れているだ  
 めか、テントの内を始めるうちは景気よく歌  
 もうたつていたが、何時の間にか、皆ぼまつ  
 てしまつていた、が、まだ誰もおかしてはい  
 ない、静かである、……何気なく、ふヒテ  
 ントから顔を出す、満月ではないか、この満  
 月の中天あたりから、青白い光をさんさんと  
 投げかけている、まさかこんな所にきて満月  
 の月見が出来ようとは、夢にも思つていなかつ  
 った、風くそそりたつ岩壁、青白くつきさす  
 ような月光、この壮大な自然のくりなす現像  
 の中の一点に投げ出されて、この月を見つめ  
 た時、今まで忘れていた俗界の事がすつと胸  
 を通り過ぎた、——ロマンチックな夜の一瞬  
 であつた。

酒沢にて

雨につかれた  
 男達

若村 輝夫

合宿をどうにか終えた一行六人は、皆十茶  
 牧場事務所前で皆とわかれ、乙見山峠を越え  
 次の目的地へ四人は白馬から後立山登山、他  
 の二人は鳥帽子から裏嶺微走へへと出発した、  
 真川の少し手前までは牧場なので良い道であ  
 ったが、それを縁の上までつかつて渡つてか  
 ら急に悪くなり、峠までほとんど癡道阿鼻、  
 やぶこぎしたり、くまざ、をかきわけて進ん  
 だ、途中Nを除いて、皆な、ヤスの中に倒れ  
 こんだり、道からナベリ落ちたりした、特に  
 二十貫へ荷物をつれたら二十七貫の丁が木  
 につまづいて倒れた時などは地響きぶれた、  
 途中、木蔭でメシをくいの味の盛りにかゝる、  
 峠には小さな世縁があり、そこからは向うは長

野原で産はまぐ、衆に小谷温泉まで行けたが温泉が見える所まで来た時カラッとバスが死んだ、あれに乗れれば一大車と重い荷をもつて、急ぎやってくる、温泉まで約一時間もある、皆がバツクリ、荷を降り出してわり二人でしまった。

この小谷温泉はひなびた温泉で、バス停前所前には、山小屋と云う大きくて古なた旅館と、民家数軒しもなく冬には中土から馬が上り下りして来る所である。

そんな所であるから皆のんびりと時河待ち一時同程してやるとバスにのせてもら、乗車後しばらくして、それまでくもっていた空から、ホッリ、ホッリ落ちてきた、中土に降った時は土砂降り、それでも、一日に往復八本しか通っていない、おそらく国鉄でも一番小さい部類にはいるであろう電車にのりこむ、最終へと云っても四半日なので、何ヶ谷駅は白馬宿りの人で海員、そこで山と落ち合

かな、又大きな雪降るから、いけどもいけとも連入は先がけない、いがかげくあきと積小雪降につく、避難小屋で大休止、お花畑を通り行管小屋につく、雨と雪風の中でテントを張り、メシを吹く、雪裏の水なので手ぶれびれる、ヤットメシを喰いホトリホトリ雨もりするテントで、シラフにもぐりこむ、夜中あまりの強風にポールがきしみだす、翌日も強風雨、風と共に霧雨が思いつき、吹きつけてくる、少々の雨具は通用しない、テントはジヤ／＼もり、シラフはドボ／＼、しかたなし小屋へにげこむ、初めは人も少なくのんびりしていたが後からくるは／＼、誰々といふこみ、いざ寝る時はフトン一枚に三人位の割、茶治りは待張が悪い、

その日縦走組はキレットが通れないと云って引き返してくるし、相母谷は道がわからなさと云って帰ってくる、明日晴なら縦走やめて下山することにして廣る、翌又強風雨、

る、下と下はその老車が大河へ、山が降ってきた食糧を介商、その日はバスがないので例によって車でメシを炊き、駅のベンチで本もののコースターシオン、ホテルしをぎめこむ、一番の温泉が温いのでゆっくり寝られる。

翌朝、一番のバスで出発、乗客十名程度、猿倉終点までひとりでデコボコ道、歩かれると云うより飛が上ると云った方がよい様な道、少々ランざりした頃、バスが急にストゥス、前を見るに前日からの雨で地盤がゆるんだのか、大きな石が十数個道のまん中に落ちてくる、運転手、乗客二三人と外に出て石はこびかたすいた所でスハッシャオーライ、

猿倉から白馬尻までは、ありふれた普通の山道、いよ／＼待望の大雪、雪裏の上に未ると猿倉に着いた時から降っていた雨がこたえてきた、休むと、上から吹き下ろして来る風と雨でふるえ上がる、その上途中でアイゼンを附けたので手がサレかんで云うこむをさ

白馬頂上まで走る、視界全くなくさかす、さかす引き返しグリセードへでる、一手手前の雪原をこるがなから下りる、

# 比良定例 ワンデリング

森村 敬司

一九五七年十二月七日、一行五人は午前七時駅前に集合した、比良定例ワンデリングの先鋒隊である、駅前からバスにのりしばらくの町京都市内を走りいよいよ鞍馬街道にさしげゝる、バスは程よく乗客をのせて山道を上する、私はバスに乗る前に買ったパンをのじっていた、この事については後からよくバスの中でやったなといわれればあの時は何か食っておかないと腹がへって掛けなくな

るだろうと思つたからである。私は高校時代の友人―彼は有名な山岳部員であつた。―は山に登る時は腹がすいては駄目だから何でもよいから口に入れておけ。自分は夜行で行く時は汽車の中でよくおむり。腹になれは連中の持つてゐる物まで何でもおむりやぶり食つて腹を一掃にしておく。空腹は最大の敵だといふ。私が彼に山の用具を借りに行った時に話してゐた。二軒茶屋を過ぎる頃から田舎へ来たといふ感じがする。バスに乗つて来る人々や、道を歩いてゐる人々の身なりも変つて来る。モンペにジーンズを着た人々をよく見かける。先輩連中はバスの中に入れて婦人に横目を使って観察してゐたらしい。バスを降りた時にその話をして聞いた。私は座つていた位置の向係上その女性は見えなかつたが、気がつかないかといふといふと、修業が戻らんといわれた。何申でも修業才一である。向もなくバスは花背峠につく。ここでバスを降り、肩仕度をして

尊敬した様な百つきせして何の先生だとさく。算数の先生だと答えると、何故今頃二人な所を歩いてゐるのかとさくので、我々の学校は土曜日が休みだと答えるところなづいていた。二人な会話を交しながら坂道を上り下りしながら歩き、尾越で子供達と別れる。尾越では大が騒ぐので村人が何事だろと我々を見送る。変化や刺激のない生活を送つてゐる田舎の人々は、まれに見る人々を物珍らしさに仕事の手を止め、時には戸外に飛び出してじろじろと、さも変化を見なれない奴が来たといふ様な目付きをして見る。私は田舎の母の御座へ行った時などもこの目にぶつかつてとまどろまふ事があり、嫌な事の一つである。尾越のあたりから道には木の枝が横にはしごのよちになつてあり、歩きにくくなる。大介長い向木馬を渡り歩きながらいよいよ沢にさしかかる。道ははっきり分らなくなり迷ひ、川の兩岸を左右しなばら、岩壁にせみのようにしがみ

一列に並び十時半に歩き初めた。

夜い天候で真黒い山々が幾重にも重なり、遠くの山はぼろーとかすんで見えて、蓬萊山が美しくかすんで見えている。市一米位の道には落葉がしきつめられ、踏むとガサガサと音が出る。北山は初めてだが美しいなごめて天竺の夜い日にはハイキングには絶好である。正后大見に着き昼食をとる。缶詰やりんごや牛乳までも飛び出して来る。皆が体ぶつてガックから取り出して来て手を差し伸べて、いどや、差がついたやろといふヒュエグイ、といふ音が聞かぬ。この時が一種楽しい時である。一時に大見を出発し、少し行くと四五人連れの小学生と一緒になる。子供達は毎日長い道のりを歩いて通学してゐるものだ。面野氏が彼等の相手を初めた。十族は道づれ世は情。路相手に面白い。これらの冗談にも水気がなつて向い返して来る。彼等は我々が学校で先生をしてゐるといふと小学生らしく

ついたり、砂利の上を歩いたり石を跳ぶあるき汗を流し息を切らせながら歩く。この沢は大変スリルに響んでいて面白いコースである。三時前に版下に着き今夜泊ることになつてゐる中村までは腰巾着であるのでゆつくりしようといふことになり、お互にうまそらに煙草をぶかしていた所へトラックがやって来たので呼び止めて中村まで乗せてもらった。このようなヒッチハイクと并して運転手はどのようになつてゐるのであろうか。無闇に手を上げ、とび出して来て、運転の邪魔をするさうさうい奴だとはかりに無視して、通りすぎるのか。それともチク／＼と歩いてゐる人達に対して同情して車を止めるのか。或は何の気なしに無意識にスレーキを踏むのか。はっきりとは分らないが私は最後の、別段何の気持も初かないで車を止めたいして邪魔にもならぬので乗せてくれるという心算状態を取りたい。勿論ヒッチハイクの横行する場所を初め



から何れかの謝礼を期待して乗せる運転手はお怒しに存らない。大阪市内に急な坂道の所に立っていて車の後部座席をして既定の料金を受け取って生活している人があつた。と云う話を聞いた事がある。

四時前に中村の酒に上り后急降をまつ。我々は先発といつても少し水を待たせていた。けで食料は持つていなく后発にまかせてあつたので只彼等の到着をまつたけであつたが、暮近くになると宿で米をかり、御飯をたぎ打めていると云う。三人が宿の前までバスをのりつけた。途中から乗ったぞうで他の人々をまだ歩いていけると云う。その人達も何もなく到着した。彼等は連絡の不十分からバスに乗つた人々を途中で大分探したぞうで、到着后直ぐぐくそつ、熊殺レヤモ、さきなれた声があつた。このかけ声は番号で夏の合宿期期中よくこの呼び声をきいたものだった。晩メシのカレーは大変うまかつた。我々ワ

極を大砲でぶつた。改しなばら戦車で行進すれば面白からうといふものなほ現われ翌日の一時過ぎまで熱の入った各々の意見がはかれた。八日朝我々は中村から坊村、真深谷、八雲北比良のコースを踏破する予定であつたが、朝少し雨が降り始め、雲がきびしくなつたので、宿で迷っているうちに、とらとら窪で沈没する敏目になつてしまつた。危険を犯しても予定を發行すべきであつたかどうかは定めにくい事であるが、リノグーがはつきりすべきであつた。昨夜以来こんな風になつてしまつたのは初めての事だ。という事だ。私にとつては昨日は意義ある日であつた。二時頃まで我々は酒で五目と将棋をしていた。川のせせらぎの音を聞きながら三將取気取りであつた。それから半分位は京都をめどして馬隊につき半分はバスにのり、途中で合流して、全部バスにのり、鼓賀街道を京都市内へ急いでいた。

ンゲルの食事にはよくカレーが頻を出す。適當にからみがあるし、飯の上にかけて喰べればおなごちをつまむ世帯柄の、カレーといつても全然味もくそもないものや、砂り入つた物やライスの硬くこけたものを顔の相を変えて喰べた事もあるし、反対に舌づつみをつて平らげた事もある。全て食世の廣次才である。料理の上手下手は后のワンデリングの士氣に影響する幸が大である。或る英國婦人が云つた。料理の上手な人と結婚すれば結婚生活は円満に永続するのである。と云う。

夜、五目並べや、将棋をしたり、新聞にもぐり込んでいた。一、二時頃よりむぐりむぐり一すれた事から盛人に議論が初めだ。吾等とはほんなものとか、人口衛星にまつわる政治的阿婆や虎骨茶止法実意後の世阿彌に阿する事等、興味ある話題が飛び出し果は邪魔者は殺せと云う持論はよくものや、キリストは偽善者だといひ、京

今回のワンデリングは種々の非難されるべき所があつたらうが、一日なごやかに遊んだことはより一層の親睦を深すに充分であつたらう。



# ふるさとの山

長谷川 勇

南東平野と山地の境これが僕の

生涯の位地だ。南にのぞめば取れなく広がる南東平野だ。晴れた日には古来古事記、万葉集、常盤風土記等々、あるいは蘇水には、水戸の党争争いは殆んど宗教戦争に似ていて或致利害の外にあるものだと云つた人もある。……中略……市川三左衛門をはじめ、諸生党の領袖が回改を左右する時を政変てみる。と天教連の一派は筑波山の方に立て籠り田



丸指右衛門を主將に推し、こき御隠居の御堂代を奉じて尊徳の志を致そよとしたりしへ夜明ナ前より、反蘇の烽火を上げた筑波山である。北にニク位行くと山地に入る。この関東平野と接する山に関東平野を一望のもとに見下しなむらの七ク位位のハイキングコースがある。我々にとつてはあまり難易はない、レガシ。小学五年生位の難いハイキングには手慣れた場所である。春の暖い日には、よくハイキングの団体を見出す。その起点は岩舟山になる。名の通り岩ばかりの山である。この岩石を頼りに生きていく人も多い。毎日グイグイと岩を爆破しては政り出している。彼上には比較的有名な寺がある。四、五回行ったはずだが、いっこうにその名はおぼえていない。四百メートル以上もあるのか、頂上まで石段がついている。町三もあるのか、その石段が春秋の彼岸には人でうすまり動けなくなる。附近には野生のゴスモスバ花を咲かせて

素にすぎない。最大の楽しみは自分自身の足で歩き初めの目的を達成することにある。一、終り良ければ全て良し。目的増こそ大切である。ゴースの中ほどに最高峰の偉容を誇る。岩石山がある。頂上のすぐ下に何の雑草の知らぬが岩石神社がある。附近は神社らしく杉の大木にこまれて神々しくなっている。しかし社は荒れるにまかされ荒れ放題である。神社前の広場には三箇点がうめである。ここで昼食をすませるのが普通である。昼食をすませた後、神社の裏側を五六の登ると頂上になる。頂上は約四平方位の広場がある。ここは木の影もなく太陽の光線を受けて芝や雑草が繁茂している。食後の休息に草の上に大の字に横になつて空しく雲を眺めるのもまた格別の味がある。なにもヘルマンヘッセのように雲の流れから感じ取らなくてもよいのではないか。『ああ、われへッセルの奇才なくしなむと歎くのかれ、我々凡人にはどうでもよ

ゆれている。石段の両側には傾斜りの門前市ができてある。鉄道やバスもこの時はかりりと臨時列車や臨時バスを繰出す。寺院では善男善女が仏前で線香を焚き合撃している。距離き不信仰者も消えてなくなれ。こんなことを言われる前に山に入ろう。北側に出ると急傾斜をなして下まで落ちていく。この下に大きな池がある。川をせき止めて作った農業用水である。小池のダムである。こんな池は岩舟山の東側の山中にも三つある。北側には小野寺の山々が見える。しがれハイキングコースはここから東に折れて繞っている。雑木林の中を、あるいは杉林の中を斜面を、あるいは分水嶺の上を渡ってゆく。端点の岩舟山の下りは年少の者には少し危険である。レガシこの難関を通りすぎればあとは阿婆ない。分水嶺に出ても木にさえぎられて見下せない。しかし木を切ったばかりの所にあれば望みだ。途中の景色は楽しみを得る一要

いことだ。光を感ぜろ。登った下り下りではあるが、全体的には下りが多くなる。足は軽い。真石の頂上からさうとう下ってから最後の登りになる。これまでは大部分雑木林であつたが、これからは全部杉と松林となる。この渡士の中には藤野小四郎もいた。亡き御隠居を勤めて尊徳の説を主唱した藤野東郷がこの世を去つてから、その子の小四郎が冥行遺跡に参加するまでには十一年の月日が経った。彼に先んじて御殿の子弟を説き先輩権右衛門を説き、日光参拜と唱えて最初から下田西平山に籠ったのも小四郎であつた。水戸の家老取を父とする彼もまた四人の統率者よりなる最高幹部の一人たることを失ななかつた。『夜明け前より』、国立公園大平山である。北東に「勝勝の石」のそして下駄の産地栃木市を望んでいる。南側は自稱、陸の松島。だそうだ。田畑の中に松や杉、程々の常緑樹にこまれた点々たる部家や家を大

海に浮ぶ鳥々と見たのであろう。たしかに石  
庭を見て大瀧に浮ぶ鳥を想像する日本人のこ  
とであるから理解できないこともあるまい。  
我々開校橋水高次の歌前の先輩が禁衛隊なら  
ぬ黒シヤツ隊と称して学校当局に反抗してス  
トライキをして立憲ったのもこの大平山であ  
る。ここを南西に下ると上田秋成の名作時局  
物語に出る大中正寺がある。附近一帯は杉の古  
木にまこまれて静寂の境の感を感じている。

この寺は、附近の小中学校の青少年十歳  
頃の合宿生活の場として夏は多く利用されて  
いる。大平山はハイキングコースの終着駅で  
ある。山上の本屋で飲みものを飲んだり名物  
？の大平だんごを食べたりしてほいどライス  
ウエーを歩いて橋水市におりよう。



出来るという気があつたから待つて行つたの  
であるが、全く持物になつただけだ。

十七日の夕方暗いままに明けやらぬ町に松本  
に到着。高々行の電車に乗る。車内は殆どオ  
ックスを降つた登山者であつた。ひんやりとす  
る冷気が身にしみた。午前四時半過ぎ高々行  
ついで、鈴蘭小屋へ行くバスは一時可あまり  
もあり他の乗客は全部上高地行のバスに乗つ  
て出発してしまつたので我々三人は近くの川  
原へ降りたり駅のあたりをぶらぶらしてはバス  
バスを待つた。バスの乗客は十人足らずで道  
路が悪く非常によく揺れたので鈴蘭小屋に着  
く途に気分が悪くなつてしまつた。二時間ば  
かり乗つたバスを降りた。いよ／＼これか  
ら炎天下をでくらはなからない。急降に何日  
も前に捨てられたと思われるような古びた真  
黒になつた麦わら帽子がおちていたのは大変  
有難かつた。普通なら見向きもせぬが、余  
りの暑さに拾い上げてかぶつて行つた。

## 気まぐれ歩き

森村 敬司

立命に入塾して最初の夏は河辺年に大急  
に入つた二人の高校時代の友人を登山に誘つ  
た。八月の半ばで少し天候が不順になるかも  
知れないが、とにかく山へ行こうと相談をし  
ちかけた。初め大山親が有力であつたが水沢  
ないときいたので中止して乗鞍へ登ると話  
がきまり計画を立てた。何しろ山と云えば大  
平山を少しよろ／＼した位であるから河の町  
蔵も経験もない。七月の合宿で初めて山らし  
所へ登つただけであるし、友人も全然経験が  
ないし云々から我々は三千米の能力にひかれ  
て、登山バスが湖上送迎しているという。お  
山に定めた日数は、一九五七年八月十六日午後  
我家からわがらを背負つて大阪駅を出発した。  
テントを持っていれは何処でも寝る所が

(47)

冷泉小屋まで六着途中に某大学の山の家が  
あり少し行くと林の中に入り日陰が出来た。  
このあたりで歩くの気遣いから小休止してい  
ると、一人の中年の人がやつて来ておいてい  
ていたので、買けん気をだして冷泉小屋まで  
前になり後になりして競争して歩いた。途中  
Y君が飯を炊ころといい出したが雨が降りそ  
ろろ気配だつたので小屋まで急いだ。小屋に  
つく頃には雨が降り出した。冷泉小屋には合  
社員らしい男女合せて十人程の人数がいて彼  
等は前も山を下つていった。我々は雨の中  
中を反対の方向に登つて行つたが、雨が急に  
激しくなり上から水が流れて来て歩行困難と  
なつたので小屋に引返し、雨がやむのを待つ  
ていたが、やみそらにもないので小屋に一泊  
することにした。煮物、参茸五拾町也、予算  
が狂つた。新聞では乗鞍で寝るつもりだった  
その晩おきまりの話しもなく破れ隙子を疑に  
し、谷めせせらぎの音を聞きながら寝入つた。

(48)

十八日、我々は小屋にザックを敷きかけて、  
昼めしと飯だけを持って、森嶺頂上を目指し  
て登り初めた。幸い時もあり上天気であつ  
た。十分程歩くと半分こわれかけた無人小屋  
を見つけた。我々は昨日も少し登ってこれ  
は宿料は取つたのにと残念がった。向も  
なく位標山荘にたどりつき、ここで我々は道  
が分らなくなつてしまつた。半時程道を探  
してやつと見つけた。それからは軽快な山登  
りであつた。天気はよれ眺めは良し踏む足ど  
りも軽かつた。途中で雪道を登つた。登山  
道に当る雪は黒ぐんでいたけれども裏に雪を  
手に取つて見たのは初めてのことであつた。  
雪をふみしめ噴火岩のこげ茶色のぶつ／＼と  
穴のあいたがらぶらの岩とび歩き道とを言  
着して歩く。上から二人のうら若き女性が下  
りて来るのに出合い一人は私に鈴蘭小屋まで  
の時向を尋ねたが私は彼女に見られていて冷  
煎小屋までだと感ちびいまして二時前位で行

けるだろうと感えると彼女等は助かつたと言  
うような顔をしておりていったがその後姿を  
見ているうちに鈴蘭までだつたと思ひ直して  
後から大きな声で五時前位かかると知れた  
いと云うと「いややわ」といわんが如くわあ  
ーという様な声を上げた。上を見上げると  
坊主山の頂上にゴロナ標頭所が見え始め、そ  
のすつと下の道を入るぞろぞろと歩いてい  
た。登山バスがつけられた所らしい。標頭所は青い空  
の中によく調和してくつきりとそびえ立ち  
その光景は即景づけられるものである。向も  
なく肩の小屋につく。恐らく百人位は先分收  
容出来る程は大きな小屋だ。ここから草の生  
えていない岩と砂土の赤きにくい道をすべ  
落ちないように一歩一歩と上つていった。大  
変苦しい。雪上はすく／＼の前だ。行きゆく人  
々をうらめしげに見上げながら人ははれと背  
かにいりきかせてあえきながら頂上についた。  
標高三〇二六米。ゆすみに社がまつてある。

ハイヒールのようなおかしな事をしては  
いたスカートの子を見られた時はびっくりさせら  
れた。少し下に標頭所が見える。眺めは期待  
した程ではなかつたのですぐ下り初めた。肩  
の小屋まで七分でかけおり冷泉小屋まで一気  
に下り荷物をうけとり白湯温泉へと急ぐ。山  
へ行つて重い荷物を背負つて坂道を登る程つ  
かれることは少い。自分の身体だけでももて  
あますのにいやなものも背中へはべりついて  
おり、足が云々事を聞いても心臓の方が早鐘  
を打ち続け悪苦しくなつて来る。王の汗が顔  
から流れ落ち目にしみこんで標頭所がボーンと  
かすんでくる。こころなるヒュよりのさし水初  
まる。牛馬足に降り足底を踏むを踏む歩を運  
ぶ。才旦着から脱れば醜体であるうが重方に  
逆つて体をもち上げるのだから疲れるのが当  
り前だと自分にいりきかせている。これに比  
べると同じ荷物を背負つていても下りは疲れ  
が半減されるだろうと思ふ。足を止せば前へ

道ゆる、足を上げるエネルギーが不要である。  
それに耳は大体前方を見渡せる余裕も出ま  
る。登山は登らなければ意味がないのである  
が私は下山も大いにやつて見た。下山はす  
るには登山をしなければならぬのであるが  
恐らくむざむざ／＼にやるだろうが一度  
アルプスの最高峰から空所までかけ降りてみた  
い。  
白湯温泉への道は昨日の時でめぐるみにな  
つていて靴の中に泥が入りズボンはどうどろ  
になり、スリッパの底に赤い線がはれる。下  
の方に履袋が見え始め、それに元氣づけられ  
たが、そこまでたどりつくまで大分困難があつ  
た。一軒の家の前の空所に私は砂利をふとん  
にして寝ころび、友人二人はクラッカーに  
喰らいついていた。私は小さい虫が首や頬に  
よつて来たので無性にうるさくなりたにさき  
落していたが彼等は小さな虫などは相手にせん



とはかりに一心に歩いていた。ここからバスにのり上高地へ急ぐ。途中で我々三人だけの乗客となり、あいきよの良い可愛らしい車掌が途中の景色を説明して呉れた。バスは梓川沿いに走り、眺めを左にのみながら大正池をすぎ上高地に着く。バスの中で我々は焼飯登山がしたくなり、かつころ宜くそびえている山に登ることにきめた。上高地の大正池のあたりの木々の美しさや雑々の調和美々々、阿見のすばらしさに魅せられた。

日が暮れようとしていたので小梨平に急いでテントを張り、懐中電灯の光をたよりにめしの仕度をした。小梨平には人がぶしく空のテントが多く集ってあった。他の人達はすでにテントの中や、キャンスプアイヤーの側で楽しそうに歌っていた。暗い高の中に木のもえる赤いほのをが印象的だった。

十九日我々は梓川の流れの音で目をさましテントの外へ出てみて改めてその美しさに可

不足のため水はあげられませんでしたと木札があらった。頂上はもうすぐだ。ここから若がぶらぶらになりくずれ落ちそうだ。岩を踏さぬ様には気をつけながら悪いをこらし一歩一歩と頂上に近づく。頂上から四方の山を眺めればし感動にふける。少し前に槍ヶ岳が見えに相であるが残念ながらその時は見えなかつた。登る時に見た煙は涙くへこんだ所から異様な硫黄の熱な匂いをあたりに漂よわせながら立ちのぼっていた。三〇分程夏山の姿を充分余しんだ后中の湯をめぐりて又よりも高い壁の中の細い道をひけより人を遠いこし。途中で見つけた水筒を背にひらきけ待まを乗ねながら、一意に中の湯へ駆けおりた。ここからバスにのり又上高地へ戻りテントをくだんで、新々村のバスはもう出ないといろのでタクシーが松本まで三五〇円で行くと云ったので同じくバスにのり運れた人二人ヒ五人相乗りを夜の道をタクシーで飛ばし、ホオンまだた

を見はった。山はすき遠つた朝の大気の中にその雄姿を誇るが如きそびえたち、空はまっさをであたりの木々は夜露にぬれてきら／＼と光っていた。九時頃我々は梓川のほとりに沿い、帝國ホテルの前を通り新穂高と眺めの登山口に未だよいよ山に入る。この時のかつころは大変おかしかった。鈴鹿をひらった桶子は上高地で夫つたので、頭には新たに鳥追女ががぶついていたような赤いあごひものついた二つ折のすげ笠をがぶり、首にはヤッケをまきつけ、背中にはにぎりめしの入ったぶろしきをすかひいに胸の前でくりつけ、足には登山靴をはいて三人分位の服装をして歩いた。他人の目には大い分おかしうつた。たぶらう、登山途中に后をふり返れば眺めはすばらしい。頂上から白い煙が立ち昇っていた。下山して来る人々に時阿はどの位あるかと尋ね、距離がだんだん短くなるのを楽しみにした。なぶら焼の小屋にたどり着く。小屋には水

く松本駅前について、上野行の電車にのり直ぐ乗り交えて新買の東海道線の洗面所の中でザックにもたれられ行ききする人やガダガダ走る音を耳にし、うとうとしながら名古屋駅に十九日朝五時頃着いた。ここで又いつものくせがひ出て走車にのるのぶ線になり、降りたくなつたので友人に降りようといふと、降りたてているから直ぐ帰るといふので一人で降りる車にきめスラットフォームで別れをつけ、日本ライオン見学に出掛けた。十一時長良川の長い鉄橋の下からライオン下りの船に乗り込み、カズリの新物をきてスピリターを持って案内された。美しい声で川岸の種々の動物の形をした岩や船太郎ゆかりの地等を案内されながら、船は船頭のごやうろのきしる音と共に炎天下を流れる早い速さを越え長良川を下り、釜知県に入り犬山城の近くで停止する。丘の上にそびえている天守閣をもつ城は某大学教授の私歌であるが、一般に公開されているといふの



で天守閣に登ってみた。一望のうちに平野は  
見渡せる。城の附近は大変美しい所であつた。  
天守閣に備えてあつた記念帳に前の親子は短  
歌などを書き入れていたが、そんな高尚な趣  
味を持たない私は、我一人愈るとかき可付と  
氏名をかき残して来た。今から思えばもう少し  
し気のきいた筆を書いて来て置けばよかつた  
と後悔している。その時は成らになく一人旅  
の寂しさの心のどこかにあつたのである。  
そして長良の鶴飼の場所に立ちより、歌のベ  
ンチで知らず／＼眠ってしまった。ふと気が  
ついたら時は夕方で三時河堰ころあつていら  
しい。静寂な空気の中でせみの鳴き声は顔に  
しみ入つていくように思われた。  
あのよらかな腰入り方をしたのは初めての事  
である。そこで急いで名古屋駅にとつて送し  
六時頃の汽車にのり、汽車はこの三日前の思  
い出にふけてゐる私を乗せて大塚に向けて  
はく進んでいた。



悪

夢

西野 博

重いザックを担ぎ一見それと念る風体の男  
が、寝音と光の交錯を背に受け、河堰の物か  
らのびれ草ともがいてゐるかの如くに足早に  
やつて来る。それでいてその男は周囲に何と  
なく自然に融け込んでゐる。こんなこと詮索  
しようがしまい、やがて彼は仲間の待つて  
ゐる駅へと入つて行つた。

「オスノ、スゲエ格好してきてナレ、エ  
グイじやないか、仲間同志互に好きなこと  
云合つてゐる。そこには駅の港着かない赤面  
気と、這立てられる気ぜわしさに圧倒され  
た興奮のルック以外何ものもなかつた。全員  
寝るぞろい愈々出立。二、三分あの街角と、

恋しいあの娘ともお別れと思つた……  
が彼等の胸中には今行くといふ意味々それだけ  
で今は一杯なのであつた。  
金屋音ど無神経に響せる車に身を委ねると  
今迄の興奮と緊張は段々と萎らぎ、何んとか  
くカッタングトン——と云つた調子にな  
り、これから行く先の話や自慢話やトランプ  
に賭する者、眠る者、人間生活の縮図が展開  
されるのである。

一連の彼等から少々離れた穴で例の男が盛  
んに何か喋つてゐる。蒸外眞面目くさつて  
いる目付にも何処となく不安と嫌味を感じら  
れる。しかしそれをも覆ひ隠さんばかりの  
意欲と情熱を発散している。それもそのはず  
彼の前には人を魅きつけずにはおかない大き  
な目、短かくきれいに切られた黒髪、優美な  
唇、坐つてゐる姿の自然さ、和歌がよく似合  
う若い女性が坐つてゐるではないか、これを  
スーパードラックスだ、

「僕が最初山に登つた時感じたことはです  
よ。山の神秘、山への挑戦そんなものじやな  
かつたんですよ。宛に無理もなかつたからに  
やならんってことを思つたわけですよ。可成  
るけ赤るけ東へ西へ歩くわけぢやなくて云う  
調子ですネ、今はそらじやありませんよ、  
それだけじや、自分も余りにも可哀想でしよ  
何んぼ特別学校出身の僕でもそれじや手搦々  
ミソマゼンナレ」

「ママ、特別学校だナンデ、そらネ、重い  
荷しよって、わざ／＼重い荷好して、高い所  
へ苦勞して登るんですからそらかもしれな  
いワネ」  
「こりや登つたなあ、手きひしひや、チヨツ  
ト——誤解や大陸は勘忍して下さいよ」  
「今のは冗談よ、私つて口の悪い女でしよ」  
「さあ、まあそれも人によつて結構」  
「じゃあ、はつてどの様にお変わりなすつたの  
？」

「いや、いや、話がヘタだからどう話してい  
いのが分らなくなつたよ、兎に角段々と話して  
行きますよ、貴女の様なきれいな……」  
簡單には云えませんが、自分ならば頼りなく  
なつてきまらなかつた。

それから彼等は色々雑談を混えて語って  
いた、多分御多寓に濁れないコースを辿って行  
つたに違いない、もう車内はすつかり賑りに  
ついて終つて、レールのきざまれる音がやつ  
て来ては消えさり、消えてはやつて来た。  
やがてその音が絶えて小さな田舎駅にその巨  
体を横えた、一人、若い暗いさみしい可  
念のフラットホーム、やがて彼は電車から降  
りて来た、続いて例の女性も姿を現わした、  
電車は鈍い音を響かせ、チールライトを残し  
つゝ遠くへ去つて行つた、一つホツソとある  
観音球だけが彼等を照らし出していた、二人は  
駅を出て雨の中に姿を消した。  
やがて彼は親友Kと例の女性と三人で歩い

ている、その女性も彼の恋人S子とはつきり  
意識されて来た、三人はアンザイレンされつ  
つ深い岩壁を登るべき高き頂上に向つて歩を  
進めていた、深い霧の始めお互の姿が消へた  
り、又忽然と現われたりした、人間関係は何  
か知ら暗灰しているかの様であつた、一歩は  
かせは命がなれ、ことがわがかりきつていろ程の  
所色……、彼はそんなことを無視しながら  
、何故自分は今こんなところにおかれていろの  
だらう？、そう考えながら彼は何も考えつく  
こともなく黙々と歩き続ける。

突然S子が口を開いた「頂上だワノ、親  
友は金々なかつた、S子が再びケルンにもた  
れかゝつて口はしつた。  
「山つて麓へ馬鹿化たとこそ、私はもつと  
もつと腹骨を背つていたのヨ、今は悲観を持  
つていろだけだわ、そこに何かがあるからと  
思つてたの、何も無いのネ、山や野を歩く貴  
方達は歩くために歩いていろみたいだワ、貴

方便のやつていろワンゲルと云つたものが  
分らなくなつちまつたワ

Kはさもろまそろに喚つていた煙草をもみ  
消しながら重い口を閉じた。

「S子さん落着いてごらん、さうすりや馬  
鹿らしくはなからなよ、兎に角登つたり歩く  
こと自体そこに目的があるんだ、それだけで  
充分ですよ、登りだれいふら登つた点ですよ、  
これじゃ単純だとおっしゃる人でしはら御殿  
手に、僕は単純さを求めていろんだ、ワンゲ  
ルもそろさん、それはい、じゃないかノ、  
「そらお、そんなことばわざ、ワンダ  
ラーたることなの、マキレルワ、」

Kはナロットと横になると「今一番崖際の時  
かんだ、折角これを求めに来たのに」と半分  
おこりながら半分満足げに目を閉じた。

そこでKとS子の話を聞いていた彼は考え  
た、彼等が云つていろことを理解しながら答  
えようと、拙言の輩にボリリとつぶやき始め

た。

「S子さん、僕はもつと君に理解してもら  
つていろと思つていたよ、この茶畑危険な頂  
上でもう一度踏することは丁度よい。  
ワンゲルは対象は山であらうと谷であらうと  
野であらうと一向に構われないんだよ、要する  
に自然でありさえすればいいんだ、対象と云  
つてもそれが絶対的かものじやないんだ、ま  
段を構ふるための場所であり、目的を進行す  
る場なんだ、現にいろ頂上だつてそらだよ、  
どうしてか言わなく、たつてS子さんなら分  
つてくれると思つたよ、そらだろ、」

「分、た構な気がするワ、それのらどろの  
の」

「つまり手袋とは自然の上に立つたものだ  
から当然登山、ワンディング、サイクリング  
とか云つたたぐいの所謂野外活動なんだよ、  
そこで僕が云つたのは、その活動それ自体に  
価値があつてもそれはそれだけの話で、それ

以上のものじゃないと思ふ人だよ。

「そら少ししら？」

「ア、ギヤンはそれのみを考へてゐるから  
分かんないんだ。Kがなんかそこでストゥス  
してゐる真型だよ」

「じゃそれ以上って何かしら？」

「それはその活動を通して目的、いかにか  
これは手段活動を通してお互に話合ひ、体の  
練習によって自己を見出す、或る意味では人  
間性を見出すことなのだ。一方又社会と云ふ  
大きな物を認識理解するところにもあると  
思ふんだよ。どうも表現がまずくつてギヤ  
んに合つて貰えなかつたか怪しいがこんな所  
にワンダーフォーゲルが存するのじゃないか  
？」

最後一言を終るか終らぬ中にギヤとKの姿は  
そこにはなかつた。彼は冷たい風が体の中を  
通り過ぎて行く凄々たる怪物に向つて必死に  
叫んでゐた。それは必然性によつてこゝろなつ

へ校門を通らな習慣はそのころかららしい  
じ人が繞んでゐるのを発見してみると  
野や山を歩きまわらう。又彼方から出てきて  
反逆のない人もこの会にはいれ、と書いてあ  
る。これは面白そうだと悪い。パンフレット  
をもらひに行こうと思つたが、呉れと云ひ出  
す心臓がない。そこでも一と厚生課から外に  
出て、たつた今急送してきたかのようにして  
紙をうけとつた。

それを見ると野や山を渡り鳥のように渡り歩  
く。ワンダーフォーゲルという会が新しくヒ  
キと小さいのである。へそれまで、ワンダー  
フォーゲルなめて雨に濡れずもなかつた。  
これは面白いと思つたが、なにしろ大学の  
部はエグイとの光入観がある。これはちかつ  
にははいれないと思ひ、二三日様子を見るこ  
とにした。

それから三日後へたぶん月曜日だったと思  
う。の昼休み、申込所として書いてあつた研

だんだん全てが静かになつた。

彼はゴトン——と云うリズムミカルな音を  
耳にした。誰かガッ、オイ、何、何とどなつ  
た。ハントして立上つた。Kがニヤ——と前  
の坐席の女と彼を見ていた。

彼は昨夜話したニヒ、夢とぶクエツタま  
まブツクを背負つた。やがて発車は止まり、  
美しい女性に心惹かれながらもデッキへと出て  
行つた。



### あの日 あの時

〈創立期〉

若村 輝夫

始業式があつてから、多分二日目だったと  
思ふが、校門前で紙をくはつてゐるのを横目  
でみながら、厚生課から学校へはいつた。

心鐘北側のベンチへ行つた。

「アノー、会にはいりたんですが、へ多分  
可細い声はつたと思ふ。」「そらですか、こ  
れに住所、名前、回生、を書いて下さい。  
それは台紙のザラザラ紙であつた。そのすみに  
名前を書き終ると、横から、入会金、三十円  
いたいただきます。あとから考えると、大勢だ  
つたと思ふ。

五月五日、朝八時半、時間ぎりぎりに飯  
出町柳駅に行く。線目がワンダーフォーゲ  
ルと書いたスラカードを持って立つていた。  
そのまわりには人が二三十人集まっていた。  
その時の装備は、足は、その朝飯前  
買った台のスック靴(価二六〇円、これは後  
に固宝的品物になつた)、ズボンにはトレベン  
上は、学主服に黒帽、手には折箱の傘と履  
法ヒンと云ういでたち。

修学院にて下車、山へ向つて出発、山のふ  
もとの橋の上で大休止、自己紹介、その時始



めて生まれは海州を 幼年時代へいわゆるガキの頃へは広島県……をやって、へ五尺七寸、十二貫五匁はそれから後、  
 頂上にて登めし 魔法ビンの紅茶をやるら  
 といつたが難ものまなひへ今ならマタタクラ  
 ちだバジレのたなしに家までもって帰ったが  
 以後この様な事はめつたにない。  
 その後、一泊二日の日程で高雄―龜岡―ホ  
 ンボン山へ行つた。ホその時初めて我が偉大  
 な一人は皆こう云う。夜の朝べき公前へ戻ん  
 だのである。

# 山と思い出

吉川 勝

比良登山を終えてから ほぼ四週前という  
 ものは山登りをやつていひ、その前學校へ

たり 防ぎよろのない大自然の恐怖に命をさ  
 らすこともある。しかし山は容易なものだ  
 はない。しかし都合で味う事の出来なれぬ  
 みも多々ある。食後の雑談の表面は真に和  
 のであり、山頂に着いた時の気持や、休憩の  
 時の一服などは例えようのない良い気持であ  
 る。又都合で見る同じ月でもデントの町から  
 見る月にはるかに強い印象を与えてくれる。  
 かわききつた喉も谷川の水でうるおすなど  
 なんども云えないものがある。そろして山の  
 思い出は非常に楽しいものになつて来るので  
 ある。あの時の上りはエグかつたとか、あの  
 所の水は非常にうまかつたとか、あの時のカ  
 レーはからすぎたとか、道にまよつて苦勞し  
 たとか、夕バコをきらして普通なら捨てるタ  
 バコの吸殻をホケットにしまつておいだとか  
 云つたように苦しかつた事は過去になると楽  
 しい思い出となる。しかしその時の状態とし  
 ては真に切実であり苦しいものである。今で

行つて講義を聞いたり、家に帰ると本を讀ん  
 だり、ラジオを聞いたり、友人と喫茶店  
 に行つたり、別段変わった生活をしてゐる奴で  
 はなく一般の人達と同じような生活をしてい  
 るのだが、何か自分自身の生活から晚餐をぬ  
 いたような物足らなれ感がある。學校へ行  
 つても授業はあまり受ける気がせず、學校で  
 は常に山登りを共にしている友人達と雑談し  
 ているが、B.O.Xにいた時は多く又その方が  
 楽しい。しかし山行きが目前にせまると不感  
 應に生活に充実さを感じ難きにも何事にとつ  
 てもフアイトボわいて来る。山が生活の一部  
 分を占めてゐるのだ。しかしそうかと思つて  
 登山は容易なものではない。夏は熱い太陽の  
 下を重いバックをせおい、二本の足で山頂目  
 指して汗を流し又冬は冬で寒さにふるえなが  
 らシユラフにもぐり又或る時は雨に降られや  
 りきれない思いをし、道に誤りセンチになつ  
 たりする、少しの不注意で大きな事故を起し

もよく戦争時代の誇を樂しそらにしてゐるの  
 を聞く。幼年時代は今よりも樂しかつた。も  
 う一處あの頃の状態になつてみたい等と云つ  
 ているのを聞くが戦争時代は生死の境をさま  
 よつてゐたのだし、幼年時代にしても悲しみ  
 もあり、悩みもあつたのだ。それが過去の思  
 い出となると苦しみも楽しいものになつて来  
 るのである。これと同じように山の苦しみも  
 それが一たび過去のものとなると思はれ、そ  
 れで苦勞も一歩思い出となると思はれ、山  
 の思い出も思い出であつてこそ楽しいもの  
 のだと思ふ。





# たのしきかな サイクリング

—内藤良雄—

自転車旅行。そよ風を青春の胸に。ばいばい。野や山へ行く。楽しみ。汽車やバスの通らない道を行く。サイクリングこそは。至極庶民的で巨つ健康的なレクリエーションである。

サイクリングはとくに高価な自転車が必要。なわけではない。實際考えてみるとこれほど安上りで健康的な楽しみはない。我々都会に住んでいるものは。都会から地方へ。サイクリストは進んでいる。初夏などの涼しい風をうけて思う。春分ベダルを踏めば。穴が胸のく。流れこんで。実にすばらしい。サイクリングに誘うと。よく懐け。ツアー車がないと云われ

体カや自転車の状態とのコンビネーションによって走り。また好み。コースが選択出来る。というサイクリングの独特の楽しみが深く味える。サイクリングツアーに出ると。主に田舎道や山の中を走るところが多いので。自分の自転車のちよつとし。ばぐらいの修理は。自分で出来るように。心掛度いものである。そのために。一応修理をするための用具。必要とされる。それも。むちやに。高くない。すむ。僕は。ドライバーとペンチ。モンキー。位である。まじむも。あれば。持つて行く。それは。修理の仕態がない時に。遠くで。故障すると。それこそ大へん。だから。メンバーが交代して。その車を引つ。は。って。やるのに。役に立つ。サイクリングは。た。だ。遠。歩。り。ばかり。走る。ように。考。え。る。が。その人の。趣味。に。応。じて。釣。り。や。その。土地。の。風景。を。兼。し。み。に。行。く。た。め。の。カ。メ。ラ。サイクリング。或いは。史。蹟。名。勝。を。訪。ね。る。と。い。つ。た。方。法。も。あり。時。に。は。自。転。車。を。小。つ。いで。谷。を。渡。り。ヒリ。陣。を。ウ

る。が。なる。程。ツアー。車。は。軽。く。て。早。く。そ。し。て。思。う。存。分。飛。ば。せ。る。し。か。し。な。に。も。特。殊。の。ツ。ア。ー。用。の。もの。が。必要。で。は。ない。そ。こ。で。サイクリング。を。多。人。数。で。行。く。場合。実。用。車。なら。実。用。車。で。皆。が。揃。わ。な。け。れ。ば。行。動。中。に。統一。が。と。れ。な。く。なる。サイクリング。は。ツ。ア。ー。車。に。こ。し。た。車。が。ない。が。実。用。車。や。軽。快。車。でも。思。う。存。分。乗。し。め。る。才。一。に。舟。着。を。持。参。して。京。都。小。ら。奈良。方面。へ。可。頼。り。で。行。く。と。す。れ。ば。この。旅。費。と。して。は。一。銭。も。か。から。ない。で。済。む。ろ。え。に。バス。や。電。車。など。では。沿。道。の。風景。も。ゆ。つ。くり。と。鑑。賞。す。る。こと。が。出来。ない。が。サイクリング。は。この。種。々。こと。は。ない。風景。の。良。い。所。な。ら。ば。少。々。休。んで。鑑。賞。し。近。く。に。名。所。史。蹟。が。あ。れ。ば。ち。よ。つ。と。立。寄。つ。て。行。く。と。い。う。よ。う。の。こ。と。が。出。来。る。また。時。向。の。心。配。が。ない。こ。と。や。乗。物。の。運。雑。す。る。よ。う。な。こ。と。を。心。配。し。な。く。て。す。む。け。れ。ど。も。この。様。な。こ。と。より。も。な。お。一。層。楽。し。み。の。味。え。る。こ。と。は。この。大。き。な。自然。の。空。か。を。自。分。に。透。した

ン。ウ。ン。い。つ。て。押。し。な。ば。ら。い。く。ツ。ア。ー。も。あり。また。一。泊。サイクリング。テント。を。持。つ。て。行。く。サイクリング。が。多。種。多。様。に。楽。し。み。が。味。え。る。僕は。最初。は。散歩。の。つ。も。り。で。乗。つ。て。いた。が。一。時。町。も。赤。く。と。あ。き。て。くる。が。自。転。車。に。の。つ。て。お。ら。ぶ。ら。と。出。か。け。る。と。一。時。町。の。時。は。す。ぐ。に。立つ。また。散歩。に。くら。べ。遠。く。に。い。ける。し。今。まで。普通。に。歩。いて。は。行。け。ない。こ。ろ。でも。い。け。る。よ。う。に。なる。自。転。車。は。その。点。い。い。と。ころ。で。ある。サイクリング。は。スキー。に。似。た。点。が。ある。よ。う。に。思。う。まだ。スキー。を。や。つ。て。向。は。ない。が。坂。道。が。人。が。に。く。る。と。こ。ろ。は。似。て。い。る。よ。う。に。感。ず。る。た。し。の。に。スキー。も。サイクリング。も。上。り。下。り。が。ある。楽。が。あ。つ。たら。必。ら。ず。苦。がある。す。な。わ。ち。峠。で。汗。を。流。して。自。転。車。を。押。して。上。り。峠。の。頂。上。で。一。服。を。し。汗。を。ぬ。ぐ。つ。て。幸。か。つ。た。と。思。い。な。が。ら。ひ。と。息。つ。いて。今。度。は。ダ。ウ。ン。ヒル。で。ある。から。その。下。り。坂。の。感。じ。と。い。う。のは。実。に。す。ば。ら。しい。上。り。が。あ。れ。ば。下。り。が。あ

るからこのよりの辛さは一つの楽しみである。僕はだから平腹なカラダ道よりも上り下りのバラエティーに富んだコースを好む。これは僕の行ったコースであるが、比較的上り下りが沢山あつて風景に富んでいたのは、京都千本北大路から杉坂を経て小野郷に入り笠峠を越えて岡山に入り、岡山から龜岡を経て老の坂、聖市の京都までのコースである。このコースは主に山の中であるが道も比較的良くすばらしい。特に杉坂までの峠は京都の街が箱庭の景で美しい。岡山街道は度々国鉄バスやトラックに合さば乗尾峠の展望は実にすばらしい。岡山の街が眼下に望め、大堰川の緑が実にきれいで、こゝろで一服をすれば静かであるが上りは下りに比べ短く、ダウンヒルが長いために楽しい。愛宕山の裏を走り越えて、越前までは道もよく快調なペースで走れる。しかしこのコースは長距離のため早朝出発

した方が時間的に楽である。すべて峠は自転車を押して上った。実用車はこゝろの時はいさや辛いと思うが、下りは車体が重いためスピードに加速度がつくためにすばらしい。他のコースとしては、京都奈良河も快走出来る。コースを迷ふにしても、舗装道路は別だが、余り景気がいいところはほゞ二りがひどくて、かえってサイクリングを行つたがために、暇のなかえゴミが入つて医者にかよわなければならぬ。と云つたようなことも起り得るが故に、せいせい自転車やバスの道ならぬところを迷ふ必要がある。何と云つてもサイクリングの楽しみはコースの如何である。同じコースを行くにしても、ツアアの場合どちらから回ると下り坂が上りよりも長くと云つた極小ことを調べる必要がある。ただどちらでも楽しいと云つて出発すると、減れるばかりでサイクリングの楽しみは半減する。それには五分の一の世帯によって調べておくこと上り

下りの長短が分かる。また途中川や池などもあることが分り巨つ臆れた名所を探れたといつたようなこともあつて、同じサイクリングをするにしても、楽しみが違ふがわつてくる。このようにサイクリングは若人にとつて実に健全なレクリエーションである。最後にサイクリングは手持の車でもあれば良いのである。そろそろ自分のもつてゐる車を身体に合せ、調整し、サドルやハンドルを上げたり下げたりして効率よくやつていけば、この様な楽しいサイクリングを楽しめるものである。

# われ等のワンゲル 七不思議

国技房 太郎

昨年四月廿日、俺はワンゲルに入会した。しかしその動機は覚えていない。四月廿日の

日記をながめてみると、ワンゲル・フォーゲルに入会する為部屋に行く。実に非衛生的な部屋である。云々と書いてある。その時、部屋に入ると、トツツアーンとシヤモシがあの昏暗中、多分汚い地下で、全くウジ虫でも湧いていそうの部屋で新生をさもうまなさをそとに吸っていた。下を見ると足のふみ場もな程のタバコのすい灰らだけ、よくもこんな所に産んでゐるなと思つた。俺の家がいくつ汚いな、いと云つても、これよりは清潔なと思つた。

ワンゲル・フォーゲルに入会した人です。俺が云ふに、トツツアーンが「あそら」ですか。はんならそこに居る申込書に名前書いて、参百円払うてんか。というて、参百円も参に全く事務的に取りやがったのである。シヤモシはいらぬ、あの高い扉をホ一、二寸高こらして、タバコの灰をパツパツと右手で落し、参百円入りやボつたわいという顔で、でニヤツとしていやがった。そはをみると、活ない指輪が本指に立てかけてあるだけ、歌



着より汚ないことは誰が見てもよくわかる。しかし昼休みになると、あの部屋が人で充ちられているのである。俺は最初不思議に思った。中んでこんな汚ない部屋に集りやがらんねやると。しかし今はそんな不思議ももう解けた。そこには、この汚いゴンクリートの部屋には、我等の青春の喜びと、楽しみがタバコの煙りと一緒に充満しているのである。そして俺はこの様な雰囲気が一番好きになり余している。山と人生は大変よく類似している。一歩一歩苦しみを味わい、失敗も頂上へ立つ。そして人間も人生に於て又社会の矛盾に於て悩みそして成功する。山と人生は切りはなせないものだ。そして俺は人間というものは大自然に対しては或けら程の存在でしかないとこのころもわかつた。何か悩むことがあれば一人て山へ行き、じつと反省する。自然が山がこの様なものであることなど、今まで全然知らなかつた。俺はワングルに入ったこ

こんな奴がおるからワングルものびてきたんや。こいつは人が云うにこいつは何人でも最初反対しよる。皆んなと議論戦わした結果よ。結論も出て来ると云うもの。それから結構正太郎ことタンクロー、小滝正行ことクリンマン、大野氏こと熊夫。こいつは全く熊夫に似た大男でよく食ひよる。これがほんまのキング・オブ・ジエツヘル。そして亦ゲルベン・ギンク、金のまとまったのをもつたことがない。部屋でいつもこんなことをいよる。一箱か五円もつてへんか。これ行こうと思つてんね」と云つてキスの真似をしよる。つまり映画行くゆうねんか。

西野ときたら、人の顔みたら「こら、お前金払えよ」といつの顔みたら百円札に見えてくるから不思議だ。まだ五千円札には見えへん。そんなにまだ嫌らないものな。それから承継、午後三時頃になると、見てるものだけはすのけなるまうなボロトのオートバイに

とを大変喜んでいよる。オ一人町柱のなだへほんま小喧かわからんが、熊に思ふ。部屋も皆え、奴や。たまには悪い指導もしてくれよるが、皆んな張り切つとるし、体裁もかまわんし、色気もなれへいや。ちよびりあるかな。それでほんまの男や、街のシスターボーイやらマンボ族に俺等の小便でもせんで飲ましたら、ちよつと位い男めたいになりよるのわからへんぞ。ほんまいよたらあんな奴等シヤモシやないけどそれこそ龍谷へはり二人だらええね。それぐらいわれ等は専の中の男だ(自分てこんなこというてたら世話ないが)。

ワングルには尊敬すべき奴がいくつかいよる。オートツッアン、トツッアンと云うニツクネームは何処から由来たんやと考察してみよるに、トツッアン所謂トツッアンや。ほんまにワングルの親父らしい。オーマン、これも所謂スーファン。ブーとぶくれとちん人町や。

下駄はきで乗つて来て部屋に入るなり、ます誰かキジ紙もつてへんかと云つて、もらふと菓をグズン。それからおもむろに新巻をとり出し吸うのである。これは彼の習慣と云うより習性である。次に福島俊平。こいつはほんまの助平や。こいつが部屋に入つてくると必ずとんな鼻面可身斬も急転直下落るとから不思議。人の悪口はこれくらいにしろ。こら、でないともマモシに龍谷へはりこまれる。あ、それから内藤。こいつは時刻表を毎日めくつていよる。おつと忘れろ所やつた。若村こいつは木皮。ほんまの皮やで。こいつが食料係になつてちよつと心配や。なんでいよたら龍夫とならぶジエツヘルの物ややからな。山へ行つて時めし喰わしてくれよんねやろな。こつちがそれこそ本皮と聞けたなれへんやろか。云いたいことはかり書いたが悪意はないんやからあしからずハハハハ……

◆ 御存知ですか？

知っておいで  
損のない話 ◆

(H N)

△山やハイキングに行つて何か腹がへつて欲  
しいな、と思つたらまちお嬢さん連中と仲良  
くなることです。

色々な話や、世話をしてや、その報酬を戴  
き込めて貰ふんです。

殊に彼ら連中とくると河邊いなし、お嬢さん  
方はそれを趣味としてゐる程である。うまく  
行けばその後はお返し。

くれなひつたらそれまでですが、そんなしる  
右に近寄らん方が身の爲めです。そして紐  
付きも敬遠した方がよさそう。念のため。

— 総合費 —

△チヨット疲れたり荷が重かつたら、目の色  
を絞えている男の前で、チヨットガエズチヤ  
ーして御覧なさい。また、く中に貴女は解  
放されます。

— 山 痛 —

△汽直に乗つて新道が欲しかったら、グダを賣  
える所があるんですよ。何処だつて？

二等車に行つて御覧なさい。必ず坐席には  
ウンザリする程だつてありますよ。二等車に  
乗られる御人は新道などは持つて下座する  
と疲れると買えますよ。

それから湯も飲食水も足らずいりようでした  
ら二等車にお越し下さい。

— 二等座台車族 —

△ワンデリングに出たら、日本語が通じる販  
り難とでも話しなさい。

だまつていては駄目。兎に角喋りなさい。  
大も喋ればは縁に當るのです。

ただ、徳言は余りない方がよろしい。風系

が風系です。お、お訂に思われる可能性充分

記 録

(過去三年分)

●一九五六年五月六日

汁一回比エ山ハイキング

出町柳 — 修學院 — 垂石坂 — 四町ヶ岳 —  
根木中堂 — 横川中堂 — 柳水崎 — 大原 —  
出町柳

●一九五六年五月十八日、十九日

高雄保津亀岡ハイキング(サイクリング)

京都駅 — 高雄 — 清滝 — 落合 — 保津城  
— 亀岡(池) — ボンボン山 — 向日町 —  
京都駅

(Party) 鎌田 木所 大野 吉沢 若村 沢崎  
(了) (E) (了) (E) (了) (E) (了) (E)

です。から、念のため、一、五千金を準備する男

半日 河村 西野 (以上ハイクル)

(E) (了) (E) (了) (E) (了) (E) (了) (E)

稲村 小滝 内藤 飯川 辰乙 永辻  
(了) (E) (了) (E) (了) (E) (了) (E) (了) (E)

(サイクリングの組)

●一九五六年六月三日

奈良宇治サイクリング

平安神宮 — 九条坂 — 山科 — 宇治 —  
大久保 — 東大橋 — 奈良坂 — 東大寺 —  
春日大社 — 唐招提寺 — 薬師寺 — 奈良 —  
観音崎 — 伏見 — 京都

●一九五六年七月九日、七月十五日

汁一回妙高々原キャンピング

ルート 京都 — 田口 — 杉野沢村役場 —  
牛小屋 — 五八木 — 笹ヶ峰 — 火打山 (ニ  
四六二) — 笹ヶ峰 — 京都

(注) 一般募集 参加七〇名

◎一九五六年七月一八日(一九九日)

### 西日本ワンテリング

京都 渡鳥取 — 鳥取砂丘 — 鳥取 — 米子  
— 境 船 美保ヶ岡(泊) — 松江 — 松岡(泊)  
— 熊本 — 坊中 — 阿蘇 — 中岳 — 高岳  
— 草千田(泊) — 坊中 — 熊本 — 鹿尾島(泊)  
— 霧島神社 — 霧島温泉 — 大波池 — 鶴  
田岳 — 温泉(泊) — 霧島神社 — 宮崎 — 昔  
高(泊) — 宮崎 — 臼杵(泊) — 鐘乳河 —  
臼杵 — 小倉(夜) — 宮高口 船 宮高 — 宮高  
口 — 京都

(Party) 折野(シ) 小浦 若村 内藤 西崎  
(E1) (E1) (E1) (E1) (E1)

◎一九五六年八月五日

### 北山荘ハイキング

出町柳 — 賣船口 — ゆり道 — 北山荘 —  
滝谷 — 賣船神社 — 賣船口 — 出町柳

(Party) 本所(シ) 永辻 大野 龜池 若村  
(E1) (E1) (E1) (PVN) (E1)  
藤田 西野  
(E1) (E1)

◎一九五六年十一月二十二日(二十六日)

### 能登半島ワンテリング

京都 — 金沢 — 輪島 — 曾々木 — 折戸 —  
孫剛崎 — 飯沼町 — 穴水 — 津徳 — 富山  
— 笹津 — 高山 — 岐阜 — 京都

(Party) 福村 戸谷 荒川 永辻  
(TA) (E4) (T々) (T々)

◎一九五六年十二月二日

### 北山荘ハイク

賣船 — 北山荘 — ゆり道 — ニノ瀬  
(Party) 永辻 大野 若村 福池 西野  
(T1) (T1) (E1) (DWY) (E1)

(Party) 福村(シ) 永辻 大野 西野  
(E1) (E1) (E1) (E1)

### 比良登山

比良登山口送バス — 大山口 — 金嶺峠 —  
八雲ヶ原 — 武奈岳 — 北比良峠 — 比良口  
(Party) ワンゲル一河

◎一九五六年十一月二日(六日)

### 大峰山脈縦走

京都 — 櫻原神宮 — 下前口 — 河川 —  
— 世茶屋 — 山上ヶ岳(泊) — 龍ヶ岳 — 小音  
賣岳 — 行者還小屋 — 弥山(泊) — 仏教岳  
— 榻子ヶ宿 — 寂迦岳 — 深仙宿(泊) —  
大日岳 — 前庭 — 牛抱峠 — 成瀬 — 前庭  
口 — 木ノ木 — 大塚 — 京都

◎一九五六年十二月十五日(十六日)

### 北山荘コンパハイキング

賣船 — 滝谷 — 北山荘 — ゆり道 — 賣船  
全員参加

◎一九五六年十月一日(七日)

### 上高地・穂高・槍

京都 — 松本 — 島々 — 上高地 — 穂高  
— 河沢 — 北穂高 — 中岳 — 槍 — 北穂  
高 — 奥穂高小屋 — 河沢 — 上高地 —  
松本 — 京都  
(Party) 若村 猪原 福村 三宅



◎一九五七年二月十七日 日三

### 南小谷スキー

京都 — 名古屋 — 松本 — 大町 — 南小谷  
北ノ田スキー場

(Party) 本所 永辻 稲村 猪原 船島 岩村  
(E1) (J1) (C1) (E1) (J1) (E1)

大野 斎藤 榎沼 西野  
(J1) (J1) (D.V.) (E1)

◎一九五七年三月十五日

### マキノスキー

◎一九五七年三月十八日

### 北山雪中登山

寶指 — 意公 — 北山荘 — 伊り通 — テノ瀬

(Party) 稲村 永辻 大野 西野  
(C1) (J1) (J1) (E1)

◎一九五七年四月四日

### 蓬萊山スキー登山

三條京政 — 浜大津 — 蓬萊 — 合比羅谷 — 蓬萊山 — スキー — 合比羅谷 — 蓬萊 — 京都

(Party) 本所(C) 永辻 小滝 猪原 西野  
(E2) (J2) (E2) (D.V.) (E2)

◎一九五七年四月二十一日

### 湖南アルプスハイク

京都 — 石山 — 里 — 湖南妙場 — 堂山 — 御栗町 — 谷崎 — 石山 — 京都

(Party) 岩村 西野  
(E2) (E2)

◎一九五七年四月二十八日

### オニ田奥比エ山ハイキング

出所郷 — 修学院 — 比エ山 — 横川中堂 —

◎一九五七年六月十日

### 伊吹山ワンテリング

京都 — 近江長岡 — 上野 — 伊吹山頂 — 笹又 — 新井 — 京都

◎一九五七年七月十日 十四日

### 立山登山 (一般募集)

京都 — 富山 — 十坪ヶ原 — 追分 — 美杉坂 — 天狗平 — 龍嶽谷(活) — 室堂 —

一ノ垂懸 — 龍嶽谷(活) — 天狗原 — 冥女平 — 富山

(Party) 稲村(C) 大野 小滝 西野 細川  
(C4) (J2) (E2) (E2) (E2)

◎一九五七年七月十四日 十八日

### 夏期合宿(妙高)

京都 — 富山 — 直江津 — 河口 — 杉野沢 — 笹ヶ峰(活) 高谷老(活) 火打山 — 笹ヶ峰

御木峠 — 大原 — 八瀬 — 出所郷

◎一九五七年五月二日 五日

### 演習林奥釣ワンテリング

出所郷 — 金ヶ — 中村(活) — 坊村 —

川合 — 枚(活) — 三國岳 — 京大演習林 — 枚(活) — 平良 — 川合 — 久多 — 石河原

— 京都

(Party) 稲村(C) 永辻 小滝 西野  
(C4) (J2) (E2) (E2)

◎一九五七年五月二十六日

### 比良裏登山

出所 — 途中 — 花折峠 — オウキ峠 —

権現岳 — 蓬萊山 — 打野小屋 — 小女郎峠 — 小女郎谷 — 蓬萊 — 浜大津 — 三條京

阪

田口—龍ノ平—大谷小屋—龍ノ平  
笠ヶ峰

(Party) 本所 (E) 永住 (E) 福村 (E) 大野 (E) 戸谷 (E) 若村 (E) 橋原 (E) 小池 (E) 寺沢 (E) 指谷 (E) 吉川 (E) 藤田 (E) 内藤 (E) 青嶽 (E) 沢崎 (E) 内山 (E) 西野 (E) 佐藤 (E) 藤原 (E) 森村 (E) 長谷川 (E) 森内 (E) 山岡 (E) 藤原 (E) 森田 (E) 山内 (E) 西野 (E) 藤原 (E)

○一九五七年七月十八日—二十一日  
大野—七倉—ニゴリ小屋—高帽子—  
三保蓮華—繪—上流地  
(Party) 戸谷 (E) 寺沢 (E)

白馬 天竜ワンデリング

○一九五七年七月十八日—二十一日  
盤ヶ峰—奥川—ニグロ川—て見山峠—  
松尾川—小谷温泉—中土—塔藪四ツ谷  
(宿)—四谷—猿倉—白馬尻小屋—大雪  
嶽—岩小屋—小雪嶽—白馬(着)—山  
頂—(着)—大雪嶽—猿倉—四ツ谷—  
松本—天竜峡(着)—佐久町ダム—豊橋

京都  
(Party) 橋原 (E) 若村 (E) 雅池 (E) 西野 (E) 藤原 (E) 若村 (E) 雅池 (E) 西野 (E)

裏銀縦走

○一九五七年七月二十一日—二十五日  
大野—七倉—ニゴリ小屋—高帽子—  
三保蓮華—繪—上流地  
(Party) 戸谷 (E) 寺沢 (E)

関西学連合ワン

○一九五七年八月九日—十一日  
大阪—高槻—龜岡—保津峡  
京都—黒部—宇奈月—椿平—阿曾原  
—仙人ダム—S字峡—十字峡—仙人ダム

黒部溪谷ワンデリング

○一九五七年九月廿八日—二日  
山歌—四日市—京都  
(Party) 永住 (E) 本所 (E) 橋原 (E) 小池 (E) 若村 (E) 戸谷 (E) 藤村 (E) 園枝 (E) 藤原 (E)

比良裏登山

○一九五七年十一月二日—三日  
出所—大原—途中—坊村—奥ノ深谷  
—大橋—八雲小屋(着)—武奈岳—北  
比良峠—大山口—比良駅—浜大津—  
京都  
(Party) 戸谷 (E) 小池 (E) 西野 (E)

京都—日本海徒坊ワンデリング

○一九五七年十一月九日—十三日  
京都(京福電鉄出町柳)—八瀬—大原—  
坂下—蓬萊山—八雲小屋—八瀬ノ滝—  
黒谷—高島町—武智—上寺—中野—

穂高登山

○一九五七年十月一日—八日  
京都—松本—上高地—穂沢—横尾—  
穂沢—北穂小屋—奥穂高—穂沢—横  
屋—穂沢—上高地—松本—京都  
(Party) 福村 (E) 戸谷 (E) 橋原 (E) 大野 (E) 寺沢 (E) 若村 (E) 藤原 (E) 森村 (E) 長谷川 (E) 藤原 (E)

鈴鹿奈良女合ワン

○一九五七年十月十二日—十三日  
京都—四日市—飯野—朝明ヒエツテ(着)  
—ハト峠—板ノ平峠—西見岳—西見  
峠—御在所岳—西見峠—葛ノ山—湯

市場——木地山——土俵表——部前——小浜  
 (Party) 京都  
 大野(シ) 若村 吉川 山田 他一名

◎一九五七年十一月十七日

北山ワンデリング

出町——鞍馬——峠下——西香春峠——岸主  
 (Party) 岸主峠——責船——出町  
 本所 福村 戸谷 永辻 猪原 若村  
 (E.S.) (C.A.) (E.A.) (J.S.) (E.S.) (E.S.)  
 小滝 西野 藤崎  
 (E.S.) (E.S.) (E.S.)

◎一九五七年十二月七日——八日

北山ワンデリング

出町——花春峠——杉峠——大見——尾越——  
 芦火谷——中村(海)——平——途中——出町  
 (Party) 永辻(シ) 福村 猪原 小滝 若村 吉川  
 (J.S.) (C.A.) (E.S.) (E.S.) (E.S.) (E.S.)

内藤 細川 藤原 森村 山田 西枝  
 (E.S.) (E.S.) (E.S.) (E.S.) (E.S.) (E.S.)  
 (Party) 西野  
 (E.S.)

◎一九五七年十二月十七日——廿九日

大鷲スキー

京都——大鷲(西)スキー——弘前——百田——  
 岳温泉——岩木山——百田——弘前——大鷲  
 (Party) スキー——東京——京都  
 戸谷 西野  
 (E.S.) (E.S.)

◎一九五八年二月十五日——廿一日

関スキー合宿

京都——関山——阿温泉——熊温泉——阿温泉  
 (Party) 本所(シ) 大野 寺沢 小滝 猪原 若村  
 (E.S.) (J.S.) (E.S.) (E.S.) (E.S.) (E.S.)  
 吉川 福島 戸谷 細川 内藤 藤原  
 (E.S.) (J.S.) (E.S.) (E.S.) (E.S.) (E.S.)

◎一九五七年十月一日——五日

大滝・蝶ワンデリング

京都——松本——上高地——密沢——大滝小屋——  
 蝶岳——横尾——須沢——上高地——松本——京都  
 (Party) 西崎(シ) 吉川 村瀬 藤田  
 (J.S.) (E.S.) (E.S.) (J.S.)

◎一九五八年一月二日——八日

唐松スキー登山

京都——松本——信濃四ッ谷——御野——黒坂——  
 唐松岳——黒坂——御野——四ッ谷——京都  
 (Party) 本所(シ) 永辻 猪原 若村 寺沢  
 (E.S.) (J.S.) (E.S.) (E.S.) (E.S.)  
 吉川 山田 長谷川 福村  
 (E.S.) (E.S.) (J.S.) (J.S.)

◎一九五八年二月廿一日——廿五日

南小谷スキー

南小谷スキー場  
 (Party) 猪原 若村 永辻 西野  
 (E.S.) (E.S.) (J.S.) (E.S.)

◎一九五八年三月十一日——十二日

横山スキー

京都——木ノ本——横山——木ノ本——京都  
 (Party) 鎌田(シ) 永辻 大野 猪原 西野  
 (J.S.) (J.S.) (J.S.) (D.V.) (E.S.)





# 立命館大学ワンダー・フォーゲル会規約

## 第一章 総則

オ一 条 本会は立命館大学ワンダー・フォーゲル会と称し、立命館大学内に置く。  
 オ二 条 本会は会員の自主的活動により、自然に親しみ、自然を感じて人間味豊かな人格を涵養することに目的とする。

## オ二 章 活動

オ三 条 本会は前条の目的遂行の爲、左記の活動を行う。  
 (一) 会宿 (二) 定例ワンデリング (三) パート・ワンデリング  
 概別誌「源泉」の発行  
 その他本会の目的を達成する爲に必要なる種研究及び、その発表会の開催等。

## オ三 章 会 員

オ六 条  
 オ七 条

本会は本会の趣旨に賛同する本学学生により組織される。  
 本会員は本会の目的遂行の爲、オ二章の活動に参加することを要する。  
 本会の活動を怠り会の運営に支障をきたす者や、本会の名誉をきずつける者は、リリーターの決議により除名する。

## オ四 章 総 則

オ八 条  
 オ九 条  
 オ十 条  
 オ十一 条  
 オ十二 条  
 オ十三 条

本会の運営機関としてリリーター会及び会費総会を置く。  
 本会の会費総会は最高決議機関であり、定額総会は年二回開く。  
 総会は会員数の三分の一以上の出席により開かれ三分の二以上の賛成により決議される。  
 総会では次の事項を議する。

一 リリーター会員の承認

一 会務の報告

一 会費の收支予算

一 会規約の變更

一 其の他重要決議事項

オ十四 条

臨時総会は会員多数の要請があり、リリーター会が必要と認められた時、将は臨時にこれを招集する。

第十五条 總會の他に会員は毎週の定期集會に於て該活動の計画承認及び報告を行う。

第五章 役員

第十六条 本會には左記の役員を置く。

- (一) 会長 一名
- (二) 副会長 一名
- (三) 幹事 一名
- (四) 副幹事 一名
- (五) 内務 一名
- (六) 外務 一名

本條はリーダー會の推薦により本會役員及び助役より一名選出する。

第十七条 本會は會員總會の推薦により本會役員及び助役より一名選出する。

第十八条 本會は會員總會の推薦により本會役員及び助役より一名選出する。

第十九条 役員は本會の活動及び会務を統轄管理する最高責任者であり、その補佐に副役員を置き内務、外務を任命する。

第二十条 会長顧問の任期は特に定めないので他の役員は一年とし原則として兼任は認めない。

第二十一条 役員には次の係を置く。

- 設備係 食料係 保健係 企画係 諸業係 記録係
- 文化係 会計係 学遠係 庶務係

第二十二条 役員は役員に任命する。

第六章 リーダー會の任務

第二十三条 リーダー會は總會を代行する。

第二十四条 リーダー會は會活動を認可し執行する。

第二十五条 リーダー會は職員を選任する。

第二十六条 リーダー會は會計監査を行う。

第二十七条 リーダー會は前年度から一會のり運任される。併し總會の承認を必要とする。

第二十八条 リーダー會は半格の要請により臨時召集される。

第七章 附則

役員は任期及び会費年度は十月一日に始まり九月三十一日まで終了する。

本會員は会費、被補費を納入しなければならぬ。

補町なく三ヶ月前納した場合、除名の対象となる。

本會の新入會員は一定額の入会費の支払を必要とする。

会費、被補費、入会費の金額は毎年度リーダー會に於て決定し總會の承認を要する。

會員は左記の活動回数を超える場合、除名の対象となる。

(一) 会宿二回(但し会宿一回は定例二回参加を待って換算される)

(二) 定例二回(但し定例一回はパーワン二回参加を待って換算される)

(三) 合ワン一回(但し学遠関係のみ)

事務所、大町、西條、牛田、中野、新井、西野





氏名	住所	出向校
青木 隆平	大阪府和泉市橋本町六八上	東海高
紅川 貞義	京都府京都市下鴨宮崎町七三	美濃東高
佐々木 善八郎	北海道空知郡美瑛市手井美瑛町	香川高
東田 新一	京都府和泉市北白川上別荘町九	白河高
通、瓜、一、哲民	京都市左京区下鴨宮崎町七三	美濃東高
三、真、邦、男、法	北海道美瑛市東一条南六丁目	富田林高
大、野、隆、三、法	大阪府松原市上町三〇五	堀川高
丸、木、村、明、至	京都市下京区綾小路通油小路西入	鳳高
小、島、滋、一、至	大阪市東住吉区小坂町四ノ三	上宮高
坂、井、裕、一、至	大阪府一宮市三好町一丁目	若原高
三、次、裕、夫、至	神戸市東灘区木山町南本篠久保一六	京尾高
藤、原、正、利、至	大阪市此花区口賀島大通一〇一	旭高
築、城、敏、夫、至	大阪市旭区今市町一ノ十九	井原高
	兵庫県尾崎市水堂本木一八	上宮高
	京都市北区小山上坂谷町一五	
	大阪府一宮市音羽通三ノ一	

3.2

氏名	住所	出向校
稻垣 重昭	兵庫県尾崎市七ツ松本三九	尼崎北高
藤原 美雄	京都市中京区西ノ京月輪町七五	大町南高
藤原 実	京都市東山区山科西宮大路通一四	念深南高
長谷川 勇	京都市石屋川路一〇一	新木高
堀 由、松、之、法	京都市左京区東竹屋町川端東入六六	藤本高
安、西、英、樹、法	京都市北区紫野南稻田町九四	桃山高
魚、新、藤、治、法	藤本県新野郡新野町西寺一八二四	道手新野園
藤、原、隆、平、法	京都市伏見区醍醐西大路町	伊丹高
佐、藤、行、平、法	大阪府阿部郡野区段南町東四ノ三	洛東高
藤、原、隆、平、法	兵庫県伊丹市高津町一七	伊丹高
森、田、久、太郎、法	兵庫県伊丹市鈴原町二ノ一八	洛東高
山、岡、野、法	京都市東山区北白川上別荘町九	山城高
林 隆平	京都市東山区松園南側花見小路花町	東市南高
	大阪府東成区東小橋北三町二ノ一八	
	京都市中京区旧丸太町千本西入下ル	
	京都市中京区寺町本町 寺町院	
	本縣縣安部郡安部市寺町寺本	



立命館大学ワンダーフォーゲル32年度会計報告  
決算書

収		入		出	
新	斗度会新繰越金	1,280	円	6,123	円
	昭和32年度入金	4,300		1,250	
	昭和32年度会費(一期分)	10,500		2,900	
	昭和32年度会費(二期分)	8,050		8,464	
	(三期分)	6,600		2,850	
	立山登山行事務収入	23,409		2,230	
	立山登山行事務収入	4,890		4,890	
	立山登山行事務収入	4,060		1,790	
	立山登山行事務収入	140		8,232	
	立山登山行事務収入			8,800	
新	斗度会新繰越金	63,229	円	63,229	円

昭和32年度RWVV会新振  
由野博

編集後記



とにむかひにも、夏の  
と日の目を見た「夏夜」  
空に落ちて鶴童子一同は、と一息、それ  
しても原稿遅れとして振まらず、特にリ  
ダー株の原稿ときては、X切つてからドドッ  
と投げこまれるありさまに編集子も往々  
◇ それでも創刊号が出来たという事は、  
ワングルにとって一つの巻居であり、ワ  
ケルの歴史の一頁の形式であると思ふ。  
夏期合宿も太郎兵五平にまより三年目の衣  
ガワングルも一歩一歩前進している。「夏  
夜」もこれに歩調を合わせて発展させたい  
会員諸君のおれみひき御協力をお願いした  
◇ 最後に創刊にあたり顧問の先主や先輩諸  
氏及び編集子以外の会員の方にも除の力に

おつていただきに感謝します。  
(M・Z)

編集委員

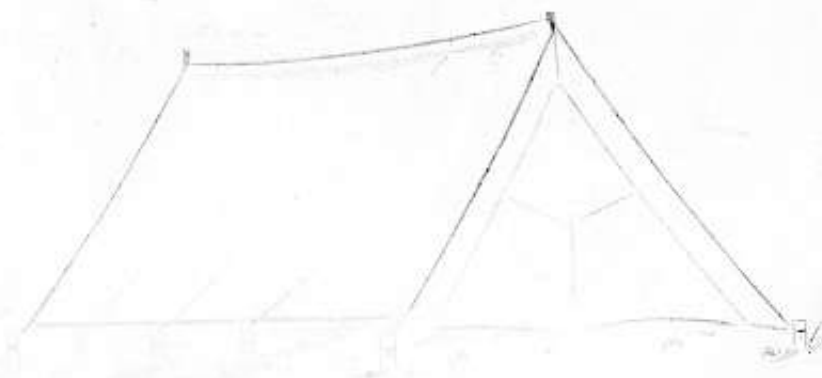
- 西崎正紀 大野 照夫
- 小滝正行 西野 博
- 長谷川 秀 林 壽子
- 山西 西野

「漂雲」 創刊号

発行 昭和三十三年七月十日  
発行所 立命館大学ワンダーフォーゲル会  
京都府京都市中京区寺町通立命館大学前  
編集責任者 西崎 正 紀  
印刷所 イシダ 隆 写印刷社  
京都府京都市中京区寺町通立命館大学前  
写真印刷 三友 印刷 所  
京都府京都市中京区寺町通立命館大学前



# テント・ザックの店



## 一沢帆布へ

東山古門前上ル  
TEL ☎ 2502



# 山は招く

テント・シュラフ  
ポンチヨウ・クツ  
etc. etc

## 放出品専門



## コニシ山岳用品店

京・二条通河原町西 TEL(3) 6302

R. Ohno



Ritsumeikan Univ. Wander Vogel

RICHINO



Ritsumeikan Univ. Wander Vogel

RITSUMEIKAN